

馬鹿斗り云つて鼓をたたくなり
 またぐらへ鼓をあてふざけ出し
 小鼓を僕受取つてふざけ出し
 ぼんくが鳴るぞと子守笑込み
 正月は下がり迄鼓なり
 肩で打つまでは花嫁聞て居る
 江戸へ出て烏帽子を暫し假に着る
 烏帽子大紋でさんまを二つ買ひ
 大紋を乗せる今年の渡し船
 大紋に萬歳常の袴なり
 大紋を脱ぐと千助萬右衛門
 大紋を脱ぐと不斷の萬右衛門
 着つ、馴れにし大紋ではやすなり
 君臣相和して笑はせる松の内

○大黒舞。

座敷 贅六 二人来て笑はせる
 萬歳 や才藏 業平 を感じ
 舞ひ納めるとどつからかいつそ出る
 門松 に大勢立つて可笑がり
 門違 ひから幾春の御萬歳
 みろく から娘百 萬年迄逃げ
 鳥追 も嫁追ひも来る麗かさ

『俳諧歳時記』に曰、悲田寺垣外の類、大黒天の姿を摸し、面をかぶり頭巾を着て民間の門々を唄ひ舞ふ、年々嘉祝の詞を以て新作して唄ふ、故に此唱歌をも大黒舞と云。江戸にて大黒舞と云ふは、新吉原町に限れり、これも非人のたぐひにて、狂言物真似をなすなり、云々とある。

其起原は延寶以前であるとの説もあるが、天保十三年十二月、吉原名主より大黒舞座元七左衛門といへる非人小屋頭へ、大黒舞の由緒を問ひし時の答書によれば、元祿中

日本橋河岸に居りし小屋頭萬次郎といへる者、豫て俗謡に巧みなりしが、或時大黒天の假面の、河の面に漂へるを拾ひ取り、之を被ぶりて右七左衛門の祖先七藏といへる同僚に三味線を弾かせ、道化萬歳、道化狂言を吉原で演じたのが、大黒舞の始めであるとしてある。

『續江戸砂子』には元日から来たやうに書いてあるが、『洞房語園異本考異』には、正月二日より大概二月の初午まで来る也、初午の後より太神樂来る云々。とありて二日から来たやうに記してある、尤も右は時代に依ての相違であるが、寶曆以後は二日から来て、大黒舞は、かた計りで多くは芝居狂言の物真似をして廓内を廻り歩いたのである。

大黒も 恵方から来りや安く見え

△二日 國大名衆御禮 裝束。

『東方朔占書』云、一日を雞とし、二日を狗とし、三日を猿とし、四日を羊とし、五日を牛とし、六日を馬とし、七日を人とし、八日を殺す、その日晴る、時は生ずるものさかえ、曇る時はわざはひありとなん。

○たから船賣。

『守貞漫稿』に、正月二日、今夜寶船の繪を枕の下にしきて寐る也、今世禁裡に用ゐる玉ふは米俵を積むの圖也、民間に賣る者は七福神或は寶蓋等を畫く、江戸は今も専ら元日、二日の宵に小民之を賣り巡る、寶船の印紙に道中双六の印紙を兼賣る、其詞に曰、道中双六おたからく、今夜の夢を初夢と云ふ、故に吉夢を見んと寶船をしくこと也。又因記、三都ともに一富士、二鷹、三茄子、以上を大吉夢とすること何れの時より云へることや、其據を聞かず云々、とあるが。其起りは家康公の駿河にありし時、初茄子の價の高きを云はんとて、先づ一に高きは富士山なり、其次は足高山なり、其次は初茄子なりと云ひしより生まれり、彼土俗は足高山をタカとのみ略語に云ふ故なるを、今にては鷹と訛り、其末は三物は目出度ものをよせたるなど心得、畫にかき掛て甞ぶに至るは餘りなることなり、と樂翁公の語られし由、『甲子夜話』にある。昔しは大晦日の夜から元日に至る夢を、初夢と稱へたのであるのを、いつとなく二日の夜に寶船の繪を枕の下に敷くやうになつたのである。其繪には七福神遊戯の上に、廻文

ながきよのどをのねふりのみなめさめなみのりふねのをこのよきかな
といふ歌があるのは皆人の知る所である。此寶船の繪は江戸時代には書肆鱗形屋で刷
り出したのを、下民は素より商家の丁稚などが「おたからく」と呼んで賣り歩いた
ものである。今も其餘風が遺つて居る。

廻文のてにはの中を鶴が舞ひ
數萬艘鱗形屋は暮に刷り
寶船晦日の浦に着きにけり
寶船逆さに讀んで下女感じ
寶船逆さにしても同じ歌
寶船日本からも一人乗
寶船鋸の齒の帆をあげる
寶船逃げて来たよな御姿
寶船出家侍諸商人
寶船はうらぐのいん神もあり

寶船しわになる程女房こぎ
寶船並木の中を呼んで行く

〔解〕松飾を並木に喩ふ、

四十二の灘を乗りぬく寶船
船頭の居所に困る寶船
船頭を今に見かけぬ寶船
紙屑のたまり初めは寶船
我が年を積むとは見えぬ寶船
逆夢にしてもよきかな寶船
子心に早く寐たがる寶船
あどさきも無い夢を見る寶船
女房と乗合にする寶船
一人乗つたが傾城の寶船
七歌仙とも謂つべき寶船

吳服屋の二人乗つてゐる寶船
 初夢を二日にするは得手勝手
 初夢は大師の連れに判じさせ
 不二の夢三〇千五〇百九十一
 不二の夢たしかに白き御襟元
 不二の夢まかりちがうと二子なり
 不二の夢一歩おごれば下卑た奴
 不二の夢下女摺鉢をぶつこわし
 不二の夢九綿めすと乳母判じ
 不二を夢みて番頭に直るなり
 不二山も目出たく見れば目は入らず
 丸綿をたしかにかぶる不二の夢
 心よき眼があくと不二どつか行き
 唐土に無い夢を見て神酒を上り

鶴と、鯛、鹿、蛇、百足、龜、猿

二日の夜皆正直なかうべなり
 二日の夢に七人にはたられる
 息子初夢に七人一座なり
 繪に書いた船も今夜は人を載せ
 一年へ手がつくと船賣つて来る

▲同日 諸大名子息方並無位無官御禮(京、大阪、奈良、堺、伏見、淀、江戸)町人御禮、
 年禮のことは前に述べたれば略す。

▲三日 御謠初、御譜代大名衆より御嶋臺献上、四座の猿樂御大廣間の御板椽に並居、
 老松、東北、高砂、三番也、此夜諸大名衆より觀世太夫へ肩衣を下さる、事恒例なり、
 此夜下乗。大下馬に箒たかる。

肩衣は枝もならさぬ風で取れ
 落葉かく表は松をたかせられ
 大名の質はながさぬ觀世水

爺 婆 の むかし 咄 も 御 吉 例
矢 車 を 召 す 夜 は 月 も 弓 は し め (狂句)

▲三日 上野大師詣 月並なれども當日わけて多し。

▲五日 御馬乗初 ○四日年越○六日年越いわふ。

『江戸歳事記』に曰、六日、良賤年越を祝ふ、六日年越といふ、今夕門松を取納む、承應の頃までは十五日に納めしとなり、古來は十五日に爆竹ありしが國禁によりて今なし云々。

江戸では七日に門松を取除くが、地方に因りては昔しの如く十五日に取納める所もある。

門松を取ると生酔目立つなり
門松を抜くより早く芽が生へる
門松を取ると出て見る玄關番
松飾り大屋根こぎにして廻り
無造作なものは大屋の小松引

七ツ起きして、いと大屋抜き
松が取れると侍が百さがり
松が取れると品川は月の沙汰
松取ると又冴え返る去年の掛
松過の喧嘩は暮の相手なり
朝寐坊六日に松を取り初め

今日、齋賣來る、都人之を求めて七種粥の用意を爲す、詳しくは「七日」の部に述べる。

只取つた商人が來りや松が取れ
摘草の走りが來ると松が取れ
まな板を叩くと常の門になり
大松と小松の境叩くなり
背戸門をすどんく、と廣くする
臺所は叩くおもては引ッこぬく

齋 からと ころぐに 小松原
 齋 でも 賣れが 異見の 聞初め
 齋 賣 鉦を 叩かぬ 斗りなり
 齋 賣 此 上 直 切る 所なし
 齋 賣 掛 直を 云つて 叱られる
 齋 賣 せなア づき合ひ せないやつ
 齋 賣 村 ても 至 極 稼ぐやつ
 齋 飾りを 隣りへ ぬける 齋 賣
 此 頃 の 雪で ときばる 齋 賣
 呼ばれる と 賣るもの に する 齋 賣
 うぬが 爲め 春の 野に 出る 齋 賣
 お飾りは わしに くれさい 齋 賣
 こび 付いた 程 錢のある 齋 賣
 まだ 鶴が 下りて 居ますと 齋 賣

七 軒で 七 文が 賣る 齋 賣
 大 口 に 八 文が 賣る 齋 籠
 三 文が 齋 を 買つて 叱られる
 しよぼく ない若 衆 齋 を 賣て 來る
 仰 山 なもの は 齋 の 料 理なり

▲六日 諸寺、諸社、諸山の僧社人山伏御禮。

僧侶の年禮は右の如く六日であるが、四日にする寺もある、年玉は重もに曲物に入れた納豆を配つたのである。

能う お寺が たに 逢ふ日と 齋 賣
 門ト 出に 坊主に 逢ふが 齋 賣
 伴僧は 松を 抜いて 人 に 聞き
 伴僧の 度々 手を入 れる 合羽籠
 合羽 籠 開けて 納豆一つ 出し
 納豆 を 取り 徳にする 獨り者

納豆を寺は夏からこねまはし
納豆へ地理にくはしき所化がつき
小さな納豆百兵衛殿へやり
わきの僧納豆箱を持つて駈け
餘慶申入れますと白衣なり
四日から年玉ぐるみ丸くなり

▲七日 七種御祝儀 世俗に云、五節句の始也、七種の菜粥をいわふ、七種は、せり、なづな、五ぎやう、はこべら、ほとけの座、すな、すしろ、これぞ七草。

正月上の子の口、若菜七種を奉る事、宇多天皇の御宇より始る、**歳事記**云、正月七日七種の菜を以て羹とし、綵勝を剪りて人としあるひは縷めて人とし以て相送る。

『守貞漫稿』に曰、正月七日、今朝三都ともに七種の粥を食す、七草の歌に曰、芹、なづな、ごげう、はこべら、ほとけのぎ、すな、すしろ、是ぞ七種、以上を七草と云也、然ども今世民間には一二種を加ふのみ、三都ともに六日に困民小農等、市中に出て賣之、京取にては賣詞曰、吉慶のなづな祝て一貫が買ておくれと云、一貫は一錢を

云ふ戯言也、江戸にてはなづなと呼行のみ、三都ともに六日賣之、同夜と七日曉と再度これをはやす、はやすと云ふは粗になづなを置き、其傍に、薪、庖丁、火箸、磨古木、杓子、銅杓子、菜箸等、七具を添へ、歳徳神の方に向ひ、先づ庖丁を取て粗板を拍ち囃子て曰、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、なづな七種」はやしてほとと云、江戸にて「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、七種なづな」と云、残り六具を次第に取り之、此語をくり返し唱へはやし、京坂は此芥に蕪菜を加へ粥に煮る、江戸にても小松と云ふ村より出る菜を加へ煮る、蓋し、芥を僅に加へ煮て、餘る芥を茶碗に納れ、水にひたして男女これに指をひたし爪を切るを七草爪と云、今日専ら爪の断切をなす也、京坂には此行をきかず。或書に曰、七草は七づゝ七度合て四十九叩くを本とす云々、とある。七種の菜を打ち囃すことに就ては『世説故事苑』に、正月七日多く鬼車鳥渡る、家々門を鍵ち戸を打ち、灯燭を滅して、これを禳ふ、和俗七種を打つに、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、と唱へるは、此鬼車鳥を忌む意也、板を打つは鬼車鳥の止まらざるやうに禳ふ也、とある。鬼車鳥とは鴨の一種なりと云ふ。

ひだるいぞせちを急げと爪を取り
 七草に遣手も長い爪を取り
 七草を娘は一つ打つて逃げ
 七草を寢床で笑ふつらにくさ
 七草を田の中で聞く首尾が出来
 七草を叩く所へ暮の人
 七草は乳母が朝起き始めなり
 七草の杓子は舌が廻りかね
 摺古木で何の鳥だか二羽叩き
 もみくちやの唐土の鳥は下女が打ち
 組板を帯ひろごけで叩くなり
 物忘れはじめは粥に毛をはやし
 内井戸へ七草一つとんといひ
 春の音にしては七師せわしなし

猿と虎渡らぬ先と唐でいひ
 摘草も鈴葉が春の三番叟(狂句)
 白馬の節會人まで草を喰ひ(同)

▲十一日 町中帳とち蔵開をいほふ。

『江戸年中行事』にも、商家帳綴、藏ひらきとて祝ひ鏡餅を雑煮となして祝ふ按に正月の餅ふ事、清少納言枕のさうし其他古昔古歌にもあまたよみてむかしよりの名目なりとある。

金銀は山山入と帳に書き
 なにもかも大福帳と書かれたり
 吉日に大福帳を書かぬなり
 此やうに書くと帳屋は干して置き
 藏の戸が開くと盃大きくし

▲十五日 小豆粥をいほふ續川譜記云、吳懸張成一婦を見る、成に謂て曰、我蠶室の地神なり正の十五粥を作りて我を祭るべし、君か蠶萬倍ならしめんと云り、かやうの故事を以ていはへるなるべし。

世風記云、正月十五日小豆粥を煮て天狗祭をなす、庭中に案をおきその上に粥をそなへ、そのかゆ凝る時、東方に向ひ再拜長跪してこれを脱すれば疫氣なし。

正月を片身おろせば小豆粥
門前に市を納める小豆粥
藤色の小豆粥喰ふ新世帯
目にかゝる所へおきやれと粥を喰ひ
物忘れ始めは粥に毛を生やし

十五日の赤豆粥を十八日迄残して置くのであるが、大抵の者は十八日に之を食ふことを忘れて微を生やして了ふのである。

○當日粥杖、かゆ木とも云、此杖にて女房の腰をうてば男子をもうくとてうつ也、今はわらんべの戯れ事となれり。

今日までを、注連の内又は松の内と稱へるが、注連繩、松飾等は前に述べた如く、七日に取除かれるのである。

松の内七ツの星を能くおぼえ

松の内ちよつと來やれと母の聲
松の内麻上下の袖だゝみ
松の内下女べんべらの綿が落ち
松の内花嫁二十四そくかり
松の内もゝ立で來るぼていふり
松の内下女塗つたとはく
松の内皆いかさまに引ツかゝり
松の内笑ふ門へは乳母來る
松の内摘草に出るせちがらさ
松の内夜そば素人賣りもする
松の内内儀毎晩慰斗をつけ
松の内我女房にもちよつと惚れ
松の内皆いためつけく
松の内五文で仕切るおやぢあり

松の内 外様を連れる御小身
 松の内 すと通して叱られる
 松の内 下女は閉門くらふなり
 松の内 知るも知らぬも覗くなり
 寐せつけて亭主と代る松の内
 すつと来てすつと出て行く松の内
 他のものは入れまいぞやと松の内
 主人相知らずうろつく松の内
 こわさうに四わりをふせる松の内
 飯焚を鳴に仕立る松の内
 禮服の生酔も來る松の内
 寐るのにも二夕通りある松の内
 白石で先ンをして居る松の内
 三聲づゝいゝ聲で呼ぶ松の内

娘同 士箱根を越える松の内

〔解〕 道中歌六、

出來合ひの武士賣切れる松の内
 こちつけた侍の出る松の内
 坊が親枕で伏せてる松の内
 錢のある顔をして居る松の内
 飯はよいものと氣のつく松の内
 嫁見世へ丸ツきり出る松の内
 商人のよき衣着たり松の内
 生酔も松の内は人がよし
 素人の生酔松の内斗り
 七草もすまぬと夫婦引分ける

○十六日 閻魔參 淺草長延寺 御藏前。

淺草觀音境内ふんま堂、牛込養善院寺町、高輪如來寺大ぼさけの事、深川法乘院。

年中行事

同日、上野、増上寺、淺草寺山門開く。

右賽日のことは「閻魔堂」及び「東叡山」の部に記したれば畧す。

○廿日 惠比須講、諸商人これをいはふ。十月同事

『江戸歳事記』に、二十日、商家愛比壽講、愛比壽大黒二神を安し、鯛魚の鮮けきを拵げて之を祭り、萬倍の利益貨殖を祈る、終夜親戚知己を迎へて宴飲す、又蛭子の像前に於て盃盤器物に至る迄、價を千兩或は萬兩などと定め、手を拍て假に商賣の學びなせり云々。

惠比須講踊り子を呼ぶ息子の子の代
惠比須講なますは見世でたつゝもり
惠比須講四五日骨をしやぶらせる
惠比須講上戸も下戸も動け得ず
惠比須講不二のぶらつく程酔はせ
惠比須講信濃はめしの二日酔
惠比須講めし備に及ぶなり

惠比須講あつかましくも傘を持ち
惠比須講傘を返しに来るやつさ
惠比須講旦那のこわくない日なり
惠比須講亭主の曰きついしけ
かたまつて灰をつゝ突く惠比須講
萬人を酔はせて返す惠比須講
逆桐の開帳をする惠比須講
やくたいも無い伊勢屋の惠比須講
てうぐに九合入出る惠比須講
五節句の外に惠比須が苦勞させ

○當月宮修行 十四日 谷中 毘沙門堂 感應寺 正五九月に有。

『續江戸砂子』上梓の享保二十年頃は右の如く、年僅かに三回、宮を執行したのであるが、漸次其回数も増加したのは「感應寺」の部に詳説せる通りである。

○修正 除夜より六日に至る、一七ケの夜追儺有、淺草寺。

淺草寺の修正會は、除夜より七日間毎夕伽^{てんや}ひをするので、衆徒六人弟子二人出仕して之を勤める、夕七ツ時頃寶前に於て讀經後、衆徒の一人鬼の面を持ち、顔へかざして出るのを他の一人が竹杖をもちて追ひ、籠を三度廻つて式を修るのである、當日此式を見んと群集する男女の爲めに、境内は甚だ雜沓を極めたのである。

節分に補陀落山へもみあげ

節分に就ては「十二月」の部に述べる。



和名、衣更着^{きまぎ}といふ【奥義抄】此月餘寒はげしくて、さらかにきぬをきれば、きぬさらさといふを略せり。

○二日灸 此日庶人多く灸治す。

『俳諧歳時記』に、二月二日男女おのく点灸す、これを二日やいと云、中華の書に、八月朔日針灸によろしといへると有、誤て二日を用る歟、八月二日もまた同じく和俗大人小兒おのく点灸す、是をも二日やいと云也、云々。

古川柳には二日灸としての句は少なきゆゑ、總て灸に關する句を収録する。

豆いりを喰ひ、蹄の敷を聞き
いり豆に花はさんりへ馳走なり
豆煎りをかんだり顔をしかめたり
冷めしのみいらを灸の時に出し
下女が灸ゆでそら豆を二合買ひ
笑ひやむ迄灸点を待つて居る
籤取りで遣手が灸をすゑてやり
灸すゑる禿の顔を見にたかり
約束を遣手まで來て一火すゑ
見世へ出る年迄ちりげすゑてやり
ちりげとすじかひばかりを妹すゑ
傾城の灸は錦へつかみ付
皮切りは女に見せる顔でなし
皮切りがすむと淨瑠璃本を出し

嫁の灸もう仕舞かのく
 一つ身をうしろで合すにぎやかさ
 灸するた子を明け番の膝へのせ
 股の灸あつくないのは哀れなり
 お内儀に灸をたのめば笑つて居
 日ざんりをすゑやれ人の目はまなこ
 四所が火だに居眠るむごい事
 四火といふ沙汰を聞きもしわたしアね
 四火をすゑ一と火くにあついかや
 四火すゑるそばへ妹は抱いて来る
 ふんざつた事もしえゝす四火をすゑ
 遠吠えの四五軒さきで四火をすゑ
 よもぎふの巻を見いゝ四火をすゑ
 振袖を着あきて四火の沙汰に成

諦めのもるい若後家四火の痕
 咳がきたのでおつことす四火の灸
 白状の日から娘の四火をやめ
 よ火をすゑやれとおんべい母かつぎ
 あくたいに臍をかゝへる灸見舞
 子の灸はあくたい笑ひくすゑ
 子の灸をすゑて四五日憎くがられ
 ぬがせると腹を叩いて小僧逃げ
 目をさまし丁稚もぐさを拂のけ
 物ぐさ太郎へ母灸するゑる
 乳母の灸そばに泣人がついて居る
 いきせいひつぱりふくろもぐさを下さい
 大のもぐさを下さいと繼子来る
 切りもぐさ大は大方賣れ残り

切りもぐさ二度の節句にあぶれたの
 二三 人見物のあるごせの灸
 ごせの灸あとで一段のぞむぞへ
 灸をむになされますかと襟を折り
 黙然として肩の灸かきこわし
 腰の灸入る程明けてよくかくす
 天晴な智恵で辻番灸をすゑ
 初手三火は振袖に似ぬけちな顔
 百灸を落して高が四文なり
 はたばりの無い氣と灸をすゑてやり
 ニツ三ツ灸を落してさどられる
 灸の紙丸めてじやらす 烏猫
 若い手をかりて娘の灸をすゑ
 基會所へ灸がすんだと呼に來る

しやうばんに信濃もさんりすゑて立ち
 正燈寺切りで歸つて灸をすゑ
 背中には滅多にすゑぬ一人者
 子ノ曰クむしが通して切りもぐさ
 又灸か久しいものと嫁はよみ
 安いてうぶく足跡へ灸をすゑ
 せうかちの灸はときんの所へすゑ
 灸の背中を野馬臺のやうに拭き
 ふんぎつた事もしえゝ灸をすゑ
 すい御らうじませあたゝをすゑた
 殿様へあたゝをすゑに國家老
 灸のあと撫でゝ冥土の物語り
 三會目灸のあとなどいちらせる
 お前まあ晝間の灸を忘れてか

宿下り今度も灸をすゑはぐり
敷入を叱るを聞けば灸の事
春すゑやせうと敷入舌を出し
又春といやるかとは墨を摺り
もつとりきみなと三升をすゑてやり

最終の句にある三升とは團十郎艾の事である、『近代世事談』に曰、元祿のはしめ神田鍛冶町箱根屋庄兵衛といふ者、箱根の温泉晒しと稱して、切艾を製す、看板あるひは艾の印に、三ツ角の紋を付る、これ市川團十郎といふ芝居役者の紋也、此切艾の製よろしとして江戸中に流布す、是を做らひ所々に切艾の製あり、庄兵衛が印しを摸しておのく三角の紋を付けて、三升屋兵庫、市川屋某などと名を付けて之れを賣る也、團十郎がはしめたるにはあらず、云々。當時専ら三升印の切艾が専ら行はれたことは右に依て知る事が出来る。

○初午の日 諸所の稻荷の社或は屋敷町屋の鎮守の宮に、五彩の幟をたて奉幣し神樂を奏す、とりわけ江府は稻荷の社多き所にて、参詣の群集の人涌くがごとし、神田組屋

町邊の宮造りは、宮、鳥居を兼日より貯へ、午前（ひるまじ）にて年中第一の産さす、初午の十日斗り前より宮、鳥居をひさく事市をなせり。

『俳諧歳事記』に曰、此日王子、妻戀、三圍、真崎等の社を始めとして、武家市中ども鎮守の稻荷を祭り、灯燭をかゞげ鼓吹して舞ふ、近くては雲間の霹靂の如く、遠くでは蒼海の波濤に似たり、江戸の賑ひ耳目を驚かすに絶えたり、とあるを見ても如何に昔の午祭りが盛んであつたか分る。

初午に爪を上げるはすねたやつ
初午はすみつこ斗りさわがしい
初午は曆で見出す祭りなり
初午は男禿に世話が焼け
初午は他人の中の見せ初め
初午は世帯の鍵のさげ初め
一ツ世帯買つて来たよと初午
だつ子にゑたるを付ける初午

午祭り隣りも同じ拍子なり
 江戸見坂千里一目に午祭
 不拍子が神慮に叶ふ午祭
 ひめのりで出る初午はいそがしい
 正一位塀の上まで顔を出し
 狐の子出来て二月が初轍
 翁神ゆゑに豆腐を好き給ふ
 二三疋狐を午に買つて来る
 鯨は初午ぎりの臺に乗り
 鯨の鏡にうつるにぎやかさ
 大門へ鯨の入るにぎやかさ
 鯨は當日供物として神前へ供へたのである、吉原は場所柄だけに、九郎助稻荷を初め
 廓内の稻荷社は各提灯をともし、夥しく雑沓を極めた。
 今日から市中の子女は、寺子屋へ入門する風習があつた。

正の字は轍に書くも筆初め
 忠臣の符丁初午から覚え
 牛の角六字を午の日から覚え
 初午の日から羊を鹿が撫で(狂句)

尚午祭りに就ては『守貞漫稿』にも、江戸にては武家及び市中稻荷祠ある事其數知へ
 からす武家及び市中巨戸必らず在之又一地面諺に江戸に多きを云て、伊勢屋、稻荷に犬の糞と
 専ら一二祠在之無之地面甚稀とす 諺に江戸に多きを云て、伊勢屋、稻荷に犬の糞と
 云也、今日必らず皆祭是稻荷祠、正月下旬以來太鼓を擔ひ、市中を賣り巡る、是屠
 兒等なり、太鼓と呼ばず撥を以て太鼓を拍ち行く、皆今日の所用なり云々。

だんまりでわるやかましい太鼓賣
 太鼓賣だまつてあるきやかましい
 太鼓の直出来てから出す火打筥
 太鼓賣は多く穢多であるから、穢れるとあつて烟草の火を貸すものもないので、自ら
 火打筥を携へて居た事は右の句に依て分る。

○八日 事始メ 江府中、策目籠等を竿の先に付て高く出す。

世俗、二月八日を事始と稱へ、十二月八日を事納めと稱へて、屋上に箒、目籠等を高く掲げる、其起因に就ては今詳かに知ることを得ぬが、或書に籠の目は清明九字也又方相の目に似たり、味噌漉の目は道家の秘咒とする九字に似たれば共に邪を除くの意なるべしとある、『用捨箱』には、其呼稱に就て左の如く記してある。

八日、無住雜談集に云、「昔は寺々只一食にて、朝食一度しけり、次第に器量弱くして非時と名づけて日中に食し、後には山も奈良も三度食す、夕のを、事と山には云へり、未申の時ばかりに非時して、法師ばら坂本に下りぬれば、夕方寄合て事と名づけて我世事して食すといへり」といふ事を載せたり、按ずるに十二月は日の短き頃にて、年の暮は事せはしくなる故に、八日限り二食となるが僧家の風俗にして、事納と唱へ二月は日も漸やく長くなれば、八日より三度食するを、事始といひしにはあらざるか云々。

氣をつけて箒を出させる新世帯
箒で目をつくは八日の湯島なり

○十五日 涅槃會 諸寺ねはんの畫圖かゝる。

佛統記ニ云、周の昭王二十四年四月八日釋迦佛生とあり、周の代は子の月を以て歳首とすれば、周の正月は今用る所の十一月なり、此代の二月は今の十二月也、佛生日の四月八日は今の二月八日にあたる、周の代の子の正月を、今用る夏^かの寅の正月にして用る理にあらずと云へり、世尊年七十九歳二月十五日夜惠日滅没し玉ふ、轉輪王の法によつて、棺槨に收め白氈を以てまどふ、力士四人これを昇くに力をつくせとも擧らず、八力士乃至十六力士これを昇げとも竟に擧らず、阿泥樓豆告て云く、たとひ城中の人こそぞりて擧ぐともあははじ、爾時摩訶迦葉瑞光を見ておどろき座を立、畢鉢羅窟より衆を領し娑羅林中に来る、佛。即ち金棺より雙足を出て示し、而も足自ら收めて棺乃ち自ら擧り虚空に昇る事高さ七多羅樹なり、拘尸那城の西門よりして東門に入、かくのごとく四方の城門に出入して城を遶りおはつて大衆即ち如來の紫磨金身を扶けて、棺を出して寶牀のうへに置き、妙香水を以て洗濯し、兜羅綿を以てつゝみ白氈を以てまどひ、また棺に入、諸天人等に及び、各々無價の梅檀、沉香、香水等を持して、大香縷を結びて棺をそのうへに置き、炬を持して香油を灌ぎて茶毘すと矣、

涅槃經及釋迦譜の説
念佛の上手を釋迦は開て寐る

十五日、日天竺の醫者匙を投げ
 十四日、時分に菅婆は匙を投げ
 お釋迦様立のまんまでせんげ也
 御臨終、二月に蟲の聲を聞き
 虫けらと一座に仁王泣て居る
 けだものや虫けらの中仁王泣き
 けだものと列ぶと仁王あはれなり
 如月は寐て卯月には起つて居る
 祝ひ日に疵のついたる涅槃像
 吼えるやら泣くやら釋迦の涅槃像
 子供の目には面白い涅槃像
 涅槃會もかまはず猫は妻を戀ひ
 おびたし猫が悔みに來ぬ斗り
 回向院涅槃に猫も見える也

涅槃像には、五十二類、天道、人道、地の三十六禽、洪河の鱗魚、天地の間に生を受けたるもの皆愁歎の形を畫く、と『俳諧歳時記』にある如く、釋迦入滅の圖にはあらゆる動物を描けども、猫のみは畫かぬを例とする、然るに右の例句中に回向院の涅槃に猫が見えるといふのは、眞の猫ではなく、金猫並に銀猫といふ二種の隠賣女の事である。

一ツ目で五十二類の外を買ひ
 右隠し賣女に關しては、『奴師勞之』にも、天明の頃まで兩國橋の東、回向院前（高野山大徳院やしき）に隠し賣女あり、金一步を金猫といひ、二朱を銀猫といひしなり、其頃川柳点の前句附に、

回向院斗り涅槃に猫も見え

といふ句ありしもをかし、京の東福寺の開帳に、兆殿司の涅槃像をおがませしに、下の所まで見えかたければ、札をさげて此下に猫ありと書きしもをかしかりき云々。と記してある、即ち回向院の涅槃會に右の隠し賣女などの參詣するのを斯く咏んだものである。

叙上の如く、涅槃像には猫だけは畫かぬものであるのに、東福寺の什寶には之れが畫

いてあるといふのは甚だ珍とせねばならぬ。

兆殿 司斗りに猫は引つかゝれ(狂句)

○當月紅毛人來朝

廿五六日到着
廿八日御目見

旅宿

本石町
三丁目

長崎屋源右衛門。

『江戸歳事記』に云、廿五日頃、紅毛人五年に一度參府、かびたん一人、筆者一人都合二人也、當月の末到着し、本石町三丁目長崎屋源右衛門方に泊し、三月上旬登城す、古來は毎年來りしが、近來五年に一度となる、又かびたん筆者の外に外科來りしが、是も文政以來改まりて二人となれり、蘭人來朝の始めは慶長十九甲寅年なりと、江戸名勝志に云へり云々。

右にいふかびたんとは、英語のキャピテン即ち船長の謂なるべし。

長崎屋 今に出るよと取り圍み
へんちきな献立を書く長崎屋
他人づき合ひをして居る長崎屋
長崎と唐は江戸でもさし向ひ

石町は遠い得意を持つて居る
石町の鐘は日本の外も聞き

石町の句に就ては「石町」の部を参照せらるべし。

○彼岸の中 六阿彌陀參。

行基菩薩一木の光明木を以、阿彌陀六軀を彫刻あり、今六所に納まる、其六所を順禮する所謂六ヶ寺は前集にくはし。

右は既に「六阿彌陀」の部に述べたれば略す。

三月

和名彌生と云、奥義抄に云、風雨あらたまりて、草木いよくおふるゆゑにいやおひ月といふを略せり。

○花さかり 立春の後七十五日を期すと、つれく草に記せり、しかれども今のさくらば、六十日をさかりの期とす、吉野は山中なれば六十五日を以て花候とす、寒暖にしたかひ又山上山下によりてす、この遅速あれども、大やうたかはずと云。

江戸に於ける名所の櫻は、既に「名所舊蹟」の部にて述べたれば、茲には單に櫻に關

する例句のみを抄出することとする。

\ 花 な れ ば こ そ 稀 人 の 坊 主 持
 花 咲 け ば 諏 訪 の 親 類 遠 く な り
 \ 花 の 供 あ ま り 急 い で 叱 ら れ る
 花 は く れ な い は 遣 手 の 禁 句 な り
 \ 花 に 背 を 向 け て 團 子 を 喰 っ て 居 る
 \ 花 な ら 花 遊 び な ら 遊 び ど さ
 花 で つ き 合 て 居 た と そ び き 出 し
 花 を 見 捨 て る と う た ひ て 聲 歸 り
 花 を 見 捨 て っ は た ご や へ 騒 ぎ こ み
 櫻 か ら 生 醉 う で を こ い で 出 る
 櫻 な ら 櫻 で 歸 る 極 陰 氣
 櫻 の 下 ト に て さ て 如 何 し 玉 ふ
 櫻 へ も や ら れ と 女 房 で か し だ て

五 百 生 さ き は 鬼 も あ れ 花 の 宴
 \ 敵 持 月 は 見 れ ども 花 に 出 ず
 毛 氈 に つ い て 花 産 賣 付 け る
 猫 の め し 入 れ 添 へ て や る 花 盛 り
 か う い ふ 注 文 だ と 花 の 蔭 へ 寄 り
 な ん と か う し や う は と 花 の 蔭 へ 寄 り
 \ わ つ ち を も 連 れ な ど 花 に け ち を つ け
 眞 ツ 盛 り 花 の 外 に は 猩 々 緋
 \ 生 醉 を 踏 臺 に し て 花 を 折 り
 奴 ふ み 臺 で 櫻 へ 手 が 届 き
 \ 入 聲 の つ ら さ 花 な ら 花 ツ 切 り
 入 聲 は 花 の 外 に は 内 斗 り
 入 聲 を あ は れ と 思 へ 山 櫻
 入 聲 を 櫻 の 中 で む ご く す る

絶えて櫻のなかりせば母安堵
 本性は櫻の下でたがふなり
 しよせんなく櫻へのぼりおりられず
 吹売は櫻の下でいぶり出し
 戒めて置かぬと櫻幹斗り
 女房のひが目にあらぬ櫻なり
 松はつれないが櫻は連れがある
 梅に鶯櫻には生酔なり
 女房に櫻くとうたはれて
 あたら櫻を不意にて見そこない
 女房は櫻であなを見付出し
 二度とは連れぬと櫻へ下戸括し
 さらの尾も櫻の時はふんで行
 ばかりではいやだと櫻連れがなし

花見。

かうぼくへ櫻を植ゑて面白し
 ぶきようなへつゝいを塗る初櫻
 久しぶり櫻の下で嫁弾じ
 よく咲いた所で局が戸をあける
 木の間から木の間へ同じ事を書き
 折る可らずが見えぬかと下戸叱り
 けふはいゝなど毛氈でぶつて貸し
 禁酒じやとぬかしながらの山櫻
 飲まぬやつ辨當喰ふと花に飽き

花見さと下女輕石で手を洗ひ
 散るらんの頃より息子花見なり
 抑もごらのらんしやうは花見なり
 一ト御殿斗り故郷へ花見なり

何かしらあるとはけちな花見なり
 紫の幕でゆかりの花見なり。
 爪音のするは古風の花見なり
 伊勢屋の花見ごこまでも花見なり
 こわ色はむほん勝負の花見をし
 上戸をつれて氣遣ひな花を見る
 息子の花見内を出る名のみなり
 定紋であたりを閑ふいゝ花見
 櫻見に夫は二町あそこから出
 傘で花見の中へござら落ち
 人同じからず花見の仲間われ
 乳貫はがつかりとして花見かへ
 道成寺花見にへちをまくらせる
 女房の智慧は花見に子をつける

花の留守。

酒を飲む酒で花見をばふかれる
 ひどり見る花にくびれた酒を飲み
 飯をたきこんで花見に女房出る
 花を見るつらかと女房過言なり
 花を見てさへやわらがぬ奥家老
 大木の花見は物がいらぬなり
 むづかしいぬを花見の先きで見る
 ちれつたいぬが花見の先きへ来る
 じねんじやうけちな花見をあてにやき

花の留守此ぎまわへと片付る
 花の留守五ツ半うち四つ打ち
 花の留守やつびし雛へ手を伸ばし
 花の留守守御謹んで相勤め

花の留守 悠然として 虱を見
 花の留守 泥棒猫でらんをや
 いやもふ今朝はらんちきと花の留守
 ぬけがらがいくつか出来る花の留守
 ほのくのまきぞへに逢ふ花の留守
 御はづして 姿見へ花の留守
 おいくちはないと局は花の留守
 い、日と和ほご腹の立つ花の留守
 お花見の留守 愛嬌のない女
 居候花の留守 居が喜見城
 花盛り 一日男世帯なり

花の山。

花の山 幕のふくらむたびに散り
 花の山 抜いたが鼠なり

花の山 足さすれがせつひ出来
 花の山 せ松の木の方へ向き
 花の山 下女は拜借もので出る
 花の山 いまだおぞうが氣は知れず
 花の山 いつそ殺せの三下り
 花の山 下戸を酔はせてもちにつき
 花の山 どうく下戸は突出され
 下戸ごもはさがり居らうと花の山
 生へぬきの幕串もある花の山
 ほころびをのぞひて歩く花の山
 披へもちらほらたかる花の山
 本性で歸るは下卑た花の山
 引張ると隣りの出来る花の山
 是むちう作左と起す花の山

花の幕。

四五日は雛に押される花の山
 シテワキで淺黄の通る花の山
 おれはくど斗り蟹花の山
 盃へ模様のおふえる花の山
 \花の幕毛虫一つで座が崩れ
 花の幕しぼるとはちと氣に掛る
 \花の幕そつと眼いて叱られる
 いつちよく咲た處へ幕を打
 すれくなものは花見の幕隣り
 しら箸で毛虫を幕の外へ投げ
 幕の内花をあざむく顔斗り
 幕の留守下女毛氈へ星を出し
 ひんのよい木登りをさる花の幕

花の朝。

—大詰は生辭の出る花の幕
 内々で茶碗のくゞる花の幕
 紫の外へ花降り琴聞え
 紫の幕人の氣を奪ふなり
 どの幕へ行くと藝子をつけて行
 花の朝神もつれてと御意なされ
 \花の朝いやあと下女もほめられる
 花の朝寶永山を下女つくり
 \下女がおもても白くど花の朝
 女中から夜の明けかゝる花の朝
 横着と日頃を呵る花の朝
 ひんのいふぬきをする花の朝
 立つくり居づくりをする花の朝

兵糧が矢ぎまをぬける花の朝
 わたしのがまだ出やすよと花の朝
 明石からおこし人の來る花の朝
 誰れどなく起きなくと花の朝
 化粧しながら島かくれ行くをいひ
 白粉をときく船をしぞ思ふ
 目のさめた人が名歌を丸くする
 人丸を寐つぶして下女まくられる
 人丸を枕時計に奥でする
 末世まで明石の浦で目をさまし
 ほのくと須磨も明石も仕度出來
 ほのくと明石も須磨もつくり立
 ほのくとよまぬは不人相で寐る

朝起きの禁呪に、人丸の歌の「ほの」と明石の浦の朝霧に「の上の句を宵に唱へ、翌

朝目が覺めてから、下の句を唱へる」といふ迷信があつた。次の「花の宵」にある、
 てるく坊主は、晴天を祈る禁呪で、今も尙行ふものがある。

花の宵。

あすありと思ひ吟ずる花の宵
 花の宵紙を丸めて祈るなり
 花の宵今道心の澤山さ
 紙籬の幽靈花の宵に出來
 起きつくらしやしやうによと賑やかさ
 あすの花下女すそまくに夜をふかし

花の暮。

花の暮身について皆かう參れ
 花の暮やれどけいかうこけいかう
 下戸ならぬ男に困る花の暮
 一ト口に五六人賣る花の暮

生 醉を家土産にする 花の暮
大きなだつ子を引張る花の暮
花の明日。

花の明日下戸にしたゝか異見され
花の明日お居間を毛虫一つ遣ひ
花物をいはねど女房けざるなり
花を見に出たあくる日に仲人する
花を見てそしてと親仁むづかしさ
買つて来た櫻と親仁卜者なり
お花見のあしたさしての話しなし
言葉戦ひ事終り花でぶち
とまつたがあたり櫻のそがになり
居續の言譯花の外はなし

花曇り。

花曇二人一本あてに春負ひ
花曇嫁今日にしよう明日にしよう
顔をしてぐるぐ巻は花曇
御んの字になつたと花見仕度する
お花見のすむ内空らへ手をあてる
花の雨。

花の雨下女色あげをむごい事
花の雨寝ずに塗つたをくやしがり
花の雨座頭つツかけものにされ
花の雨昨日の坊主罪に落ち
花の雨琴しんまくにおへぬなり
花の雨のちは後生の沙汰になり
後生までいひたてられる花の雨
傘の大束を出す花の雨

奥中へ一と揃あてる花の雨
 今朝の花見が濡れやうといらぬ世話
 琴箱へぼちりくと生憎さ
 毛氈を敷くとほろく落ちて来る
 氣の毒さ櫻の下で雨宿り
 物は相談傘と花と替へ
 あらう事花をやつたら傘を貸し
 百姓の茶屋になる日は降りたがり
 引窓をしめて辨當を内で喰ひ
 空を睨めく辨當を内で喰ひ
 花戻り。

戯談に談議など聞く花戻り
 骨斗りさじてよろける花戻り
 尋常のはいぼくをいふ花戻り

花の枝。

辨當持を花いけにして戻り
 櫻さんおっいくと駕の者

花の枝持つて風雅な倒れ者
 花の枝にこりくと振りかたげ
 花の枝おひとりの時上げませう
 叱られた所へうつちやる花の枝
 賞められるたび持ち直す花の枝
 姦ましい跡から花を一とからげ
 櫻花兄は蕾のあるを取り
 櫻花しらふで擔ぐものでなし
 来て見ると生酔花を振廻し
 生酔と下戸と櫻をねちり合ひ
 やかましき片くの子が花を持ち

花散る。

生酔の突當るたび花の散り
花や散るらんで女中をこわがらせ
お座敷に散るは昨日のお家づと
落花するそばに奴の高野
花にうづまつて奴の高野
だいなしに散るわと奴起される
おもいれを寝たと櫻をふつふるひ

○雑市 十間店 人形町 尾張町 麴町等 二月末より市立。三月二日至。

『江戸歳事記』に、二月廿五日、今日より三月二日迄、雛人形同調度の市立、街上に假屋を補理ひ、雛人形諸器物に至る迄、金玉を縷め造りて商ふ、是を求る人晝夜大路に満てり、中にも十軒店を繁華の第一とす、内裏雛は寛政の頃、江戸の人形師原舟月といふ者一般の製を工夫し、名けて古今ひなといふ、是より以來世に行れて大かた此製作にならへり。とある如く今でも雑市は十軒店が第一である、右に關しては「十軒

店」の部に述べたれば、茲には雑市の例句を掲げる。

雑店ではづかしさうに直切つてる
雑店で生酔一步つけあげる
雑店へ舁殿をする能き買人
雑店で花見に行かぬ筈にする
雑店へ素見の筈で娘行き
雑店で買って、和尚目立なり
雑市に月と山とは直が高し

〔解〕舟月と玉山、

雛なればこそ間に合ふと買に出る
雛の賣上を女房は二枚とり
雛に菰苳き合はせずの尾張町
雛の枕小馬鹿にならぬ高いもの
雛のくまきにや伴頭も困つてる

年中行事

初の雛旦那御太義なさつたの
 まづ桐を植ゑる雛店系亭主行き
 買つけぬなごゝ内裏を二米につけ
 にこついた内儀のあとへ雛をしよ
 ほしい顔せまいぞと雛店へつれ
 芝居をばやめて内裏の願ひなり
 なんぼべえしますとけちな紙ひゝな
 草庵の一町つゝく雛の市
 内儀が一步たした雛安い筈
 小ぬすみの白状をして雛を買ひ
 酔つたやつ二米づゝ雛をつけあげる
 おそはつた通りに雛をねだるなり
 大ごらだくと雛をかつき込
 萬屋へ主上を始めたてまつり

箱入の市は一ト月先きに立ち
 内裏雛むきにまけたで氣苦勞さ
 目かくしの雛は手の鳴る方へ賣れ(狂句)
 ふだん着で堀出しに行く大内裏
 逆鱗のやうな内裏は賣れ残り
 何宗か知らず和尚が雛を買ひ
 けちな雛一軒店で買て来る

▲三日 上巳御祝儀 今日を重三と云、又上巳と云、上は初といふ意也、いにしへは
 三月初の巳の日上巳とす、三月は辰の月なれば巳を除くとす、不祥を除くこゝろ也
 [宋書]魏より後、但三月三日を用ゐて復巳を用ひす。

上巳の御祝儀には、諸大名は登城し、貴賤は佳節を祝ひ、女子は雛祭りをするやうに
 なつたのである、『守貞漫稿』に、三月三日上巳と云、又桃花の節なる故に婦女子は桃
 の節句と云、今世今日三都ともに女子雛祭す、古へは雛遊と云て今日のみに非ず中略
 近世幼稚の遊びに土偶人等を並べ小なる鍋釜其他庖厨の具を以て、まゝごと飯事也、

平日の遊びとすると同じき也中略近世迄雛祭には物を供するに蛤殻を用ひしと聞く。今三都は蛤を供するも昔殻を用ひし遺意ならん、或古老曰、昔しの雛遊の調度は質素にて近世の如き善美の物を用ひず、飯器皆蛤貝を用ふ、寶曆頃より漸く廢して貧民の兒のみ用之云々、是民間のことなれども貧戸のみならず用之、寶曆後も貧家の兒は猶蛤殻を用ひし也。とあるにて左記の句を解するを得べし。

蛤であげるが娘氣に入らず
蛤の湯で雛様をふいたやう
蛤は桃のみやこを吹いたやう
水引で蛤を釣る雛祭り

雛の起原と名稱に就きては『近代世事談』に、敏達天皇二年にはしまる、雛は元鳥の子の惣名也、鳥の子は愛らしきものゆへ名とせり、小女之を翫ふは、女の世帯の諺を元とする教なり、近世大裡雛とて公卿の形に作るあり、むかしは紙雛なり云々とある。前記の如く初めはまゝ事の如く、婦女子の翫んだものであるが、後には桃の節句に、座敷に段を構へて飾り、菱餅、白酒、桃の花、煎り豆等を供へ、初節句にはわけて贈

はしく祭るやうになつたのである。

雛の酒みんな飲まれて泣て居る
雛の酒茶碗でのんで叱られる
雛の酒下戸をへだてぬ澄み濁り
清濁を分けてもてなす雛の酒
行き廻りかん廻りのむ雛の酒
白酒をきれいに飲んだ鼻の先
白酒の徳利階下の下へ入れ
白酒に酔て公卿衆の供をわり
眞ッ白な酒桃園の院へ上げ
意地のきたなさ白酒でようろよろ
ほめたる白酒で嫁赤くなり
雛をほめるとのろつこい酒が出る
味淋酒を入れてびいそろすぐなり

ようろよろするは階下を遠ざける
 小笠原流で供へる雛の餅
 重箱へそりをうたせる雛の餅
 禮に着て来たのを菱の餅へかけ
 初節句其如月に餅を搗き
 煎豆に花さは雛へ馳走なり
 煎豆に花が禁裡へ馳走なり
 豆がらで豆をたきく雛分ける
 何事のやうに兄弟雛を分け
 手ごみにはさせぬと母は雛を分け
 逆鱗ばつて兄弟で雛を分け
 雛分けに嫁は一日里へ行き
 雛分けに母手を出して叱られる
 初の雛亭主さわいで叱られる

初の雛伯母御やつきとされたなり
 初の雛亭主もつきについて居る
 初の雛心當りが二三軒
 初の雛旦那御太義なさつたの
 初雛のあるじ盃しやぶつてる
 追々に割込の来る初の雛
 席いまだ定まらざるは初の雛
 龍顔殊にうるはしき初の雛
 天顔のうるはしからぬ母の雛
 おがむから出しなさるなと母の雛
 やかましいおれが雛だと母はいひ
 嫁の雛かざらぬ内に人だかり
 隔心に座つて御座る嫁の雛
 嫁禮の衣裳かたづけ雛を出し

腰帯を雛の幕とは嫁の作
 冠を桃の下にて嫁直し
 嫁と嫁話すを聞けば雛の事
 見ているが多いので三月が嫁苦勞
 嫁娘南北朝の雛をたて
 紙雛が抱かつて居たで嫁は逃げ
 紙雛に角力取らせる男の子
 紙雛は柳の葉程窓をあけ
 紙雛は雨具を召した立姿
 紙雛を隣りの搗屋つき倒し
 紙雛はころぶ時にも二人連れ
 紙雛も母のは腰が曲がるなり
 紙雛はちやつとで取れぬ所へ落ち
 紙雛へ棒を通してぼろを下げ

雛祭り之れからかうは姉さんの
 雛祭りゆかの下から馳走する
 雛祭り旦那ごころへ行きなさい
 雛祭り見世から袴垂れが来る
 お妾はまだ氣がすまぬ雛祭り
 下總で尻のしまらぬ雛祭り
 馬付の花賣も来る雛祭り
 村の嫁今戸のでくで雛祭り
 土みかぎ様べいたてる田舎雛
 土みかぎ様を姉へも飾るなり
 雛棚へ艾を置くは姉の智恵
 雛棚のひよごり越へを鼠来る
 雛棚のしがをかくすも山櫻
 雛棚の樋合をふさぐ楊枝さし

雛棚の家主らしい次郎左衛門
 雛の棚いちると罽が當るによ
 雛の壇五條あたりは眞ッ裸
 雛の膳客は握りや左り箸
 かしましく階下に並ぶ雛の客
 居なりかと脊中を叩く雛の客
 居なりかと雛の使に聞かれけり
 雛抱いてなめて居るのが雛の主
 褒められて呉れた名をいふ雛の主
 駈け込んで雛をせつゝく八ッ下り
 雛の箱まだ多も見ず開けたがり
 雛の箱ころんだ所で開けて見る
 雛箱へ娘道からついて来る
 窓へ出て雛の便りを待つて居る

おちやつびい節句の禮に早く二三四来る
 節句前箱でとりこむ女の子
 初節句貫ふたんびに立て直し
 目ぼしい雛を節句の日叔母持參
 中納言ぐらいを呉れるけちな叔父
 袖風のやうな雛様叔父が呉れ
 袖形へ載せてお針へ雛の菓子
 雛の菓子五歳六歳のやうに詰め
 悪人が隣りにあるで早い雛
 質屋からみもすそ川の流れ雛
 泣きながら氣張つて母は雛を賣り
 拂ひ雛泣くく母はきばるなり
 混雑さ雛に夜食がそつて来る
 雛の飯おらがへも来ていたゝきな

うるさくてどうもならぬと雛を出し
 雛の昇殿ゆるさぬでだいをいひ
 内裏造營押入を明渡し
 内裏造營四分板を小わりなり
 惜しさうに隅からはさむ雛の重
 内氣には似す内裏をば小さいがり
 いとけない主上が娘氣に入らず
 振袖を押へて雛を直すなり
 金魚を片身上げておくけちな雛
 けちな雛そばやの膳ですぐに上げ
 まだ年ア若いな雛様に梅
 餘寒去りかね雛棚に梅椿
 雛寒く桃のやうくたるを上げ

母親のやうに遣手が雛の世話
 妹だけ雛までせいがひくいなり
 新世帯わけのつく迄雛がなし
 真中に本店からの内裏雛
 内裏雛つとにして行く乳母がせな
 ごういふ氣だかと赤子に雛を見せ
 雛支度ほうろく賣も支度する
 雛様へ野郎来て居る猫の番
 雛のある内はおふくろ氣が残り
 嘸おしからうと園との雛をほめ
 雛の座敷から男は押し出され
 逃げただけ雛さま七分三分なり
 天上の交りをする太郎左衛門
 出したり入れたり高砂金太郎

色 娘 春 三 夏 六 雛 を 出 し

〔解〕 三月の雛祭り、六月の虫干、

春 三 夏 六 に 娘 雛 を 出 し

○雞合 **玉燭寶典**ニ云、寒食の節、城市各雞を闘はしめて戯とす。

雞合せは、周の世に始めて起つたのである、『俳諧歳時記』に曰、禁裡清凉殿南階の前にて闘雞あり、其雞諸家の中雲客これを出さる、仙納彌市此ことに預り勝負を決す、是もまた行事と稱す。

生きた雞おがんで歸る雞合せ

御使者の禮儀雞の蹴合やう

○蓬餅 **文徳實錄**草あり、俗に母子草と名づく、二月はしめて生ず、莖葉白うして脆し、三月三日にあふ屈あふことに婦女これをとり、蒸て搗て以て糕とす、つたへて歳事とす。

蓬餅の起原に就ては、因幡の人永澤家光より始まるといふ説がある、家光は其母懐胎して死去したる時、土中で産れた人で、成長の後出家して名を通幻と改め、母の菩提をとひて諸國を遍參して攝州に至り、豊島郡に永澤寺といふを營建し、其所を母子村

と名づけ、三月三日此所の母子草を以て糕に造つたのが歳事の始めであるといふ。

蓬餅とは京阪の名で、江戸では草餅と稱へ、親族知音より、雛調度或は人形其他の祝ひ物を、贈られた返報として配つたものである。

草餅の使ひはすぐに暇乞

草餅の使公家衆にとめられる

草餅を焼いて宿へも進せろよ

草餅の響冠りが横になり

草餅を産んで妾の胸が焼け

かみさまは草の餅までやき通し

氣の知れぬ下女草餅を焼いて出し

禮に着て來たのを菱の餅へかけ

○沙干 品川沖 深川沖。

まだ沙のみちぬるほどに棹さしてはるか沖に至る、卯の過がてより引そめて午ばかりには目のおよばぬほど限りなく、海底たちまち陸地となれり、干瀉の船よりおりたち蠮

蛤をひろひ、砂中の平目をふみ、みるめをかづきあげて興に入、またすこしの引残りたる窪みの浅沙にまごへる小魚をすくひて宴を催す。

三月から四月迄を沙干狩の季節とするが、其内舊三月三日が沙の最も引く時で、卯の刻過即ち今の午前六時過より引初めて、正午頃には房總まで陸地が續くかと疑はるゝまで干瀉になるので、都人は早且より船に乗り、品川、深川、芝浦、高輪、佃島、遠くは中川の沖へ出掛けて貝を拾ひ魚を養つて、一日の清遊を試むるのである。

海底に足跡のあるよい天氣
麗かさ品川沖へかちはだし
麗かさ海の底にも足の痕
大海で土ほじりする麗かさ
沙干狩安房や上總を逆かに見る
沙干狩さすがが見て居る女形
沙干狩たゞき放しの供が出る
沙干には内の苦勞も忘れ貝

草履取沙干の供が名残りなり
面白く袂をしぼる沙干狩
落ちたるはけして拾はぬ沙干狩
ばらりツと沙干は人を蒔たやう
鷹の餌をのがれて沙干に拾はれる
蛤に化けて沙干に拾はれる
品川の干瀉が息子運のつき
品川で見事な貝は皆にされ
見通しに居るのに沙干母案じ
三階に居るを沙干に母案じ
能い仕掛け沙干が土手と變る也
人魚を買つて来て沙干不首尾なり
蛤に比目魚女房はふとくしん
三月はいとなまめいた漁師出る

○五日 奴婢の出かはり。

奉公人出代に就ては『雲橋類要』に、秦の人本家婢を得て一子を生む、妻是を悪み乞て隣家に與ふ、隣家大に富貴也、本家貧し、後二月二日を以て取歸す、后復本家富隣り貧し、和俗二月二日を家僕の交代の節とすると、元此に本くか云々。とある如く、昔しは二月二日を江戸奉公人の出代の日に定めてあつたが、明暦三年正月十八日の大火に依りて其年三月五日に出代りすべき由、公より御沙汰ありたる爲め、夫れより出代りは三月五日に改まつたのである。『安齋隨筆』にも右と同じき説を載せてあるが、『世事百談』には、近世武家編年略の、寛文八年十二月十六日、新有命曰、舊例江戸士民之家入仕之奴僕、以二月二日爲放遣之期、來年以後須以三月五日爲期、を正しとし、之れに附記して、寛文八年二月一日、江戸大火あれば、安齋のいはれし明暦の大火は、寛文の火事をあやまり傳へしにはあらずや、そは二月一日大火あるによりて、二日の出かはりを、三月五日までのばしたるが、そのまゝ通例とはなれるなるべし、云々とある。

出代りに日和のよいも恥の内

出代りに勘定高いやつ残り
 出代りの乳母は寐顔に暇乞
 出代りの涙にしてはこぼし過ぎ
 出代りて娘の戀の橋が落ち
 下がる乳母亭主にこゝろ櫃をしよひ
 つかひたてましたと下女へ暇乞
 桃の花下女が迎ひの馬につけ
 下女がせな泣くなと馬にかきのせる
 出て行くを忘れる程に下女は酔ひ
 裏店で去られたやうに下女さがり
 此ぬしなべとある盟馬につけ
 門口で下女がおやぢは嘶かせ
 おとなしき櫃や葛籠を馬につけ
 塗り下駄をいたゞいてせな腰をかけ

五日より五日までなり下女が色
 白酒に酔ふて、下女はさ縫納め
 あらつばい下女縫皿が割り納め
 雛の椀下女の叱られ納めなり
 雛を仕まふと人間の直をつける
 雛のべい縫ふと針妙暇乞
 山の手の目見えは井戸を覗いて見
 ちつとして目見えは狎に吠へられる
 目見えだぞ見えて小袖で給仕なり
 けんやくで一つまなこの下女を置き
 御隠居をあま口に見てめしにつき
 御指南をうけましたらとめしにつき
 三月は大津繪も来てめしにつき
 山の神おこせ斗りをめしにつけ

奉公人の出代りを賣りに來る
 男の出代りおつちよつて衝ツと出る
 もぎごうな出代り馬でうつ走り
 曇つても先づ出代りの義理が濟み
 かみさまは草の餅までやき通し

昔しの奉公人に對する引請証文は、左の如く始んど一定した文句で、請宿即ち現今の
 口入業者から差入れたのである。

奉公人請狀の事

一何某義生國より能存知慥なる者に付我等請人に相立貴殿方へ何々奉公に差出候處實
 正也然る上は御給金壹ヶ年何兩何分と相定め爲御取換金何兩慥に受取申候云々
 文句だけは嚴かしいが、其實は形式的に差入れたもので請人は壹分の手數料を取つて
 三文判を捺し、素性も知らぬ者に對し、生國より能存知といふ文句さへ書き入れたの
 である。

壹分さへ出せば生國より存知

生國を能く存せずが壹分取り
人主を三文出して買ひにやり
請人と人主のある御新造

終りの句は、雇女を本妻にしたといふ句である。尙請状には寺請といふのが必要であつた、こは其當時他宗を禁する國法であつたので、雇主は奉公人の宗旨を調べて、佛教徒であるや否やを確かめたのである。

法の聲請状にまで行き届き
寺請が入用かして御參詣
請状が済むと買たいもの斗り
乳母の名は請状の時讀む斗り
けいせいに三本足らぬ請状し
冷麥でする請状は二度目なり

〔解〕秋の出代り、

○十五日

隅田川大念佛

梅若參

梅柳山本母寺。

梅若の事蹟は「本母寺」の部に委しく記せり。

○十七日

淺草三社を神輿に遷し本堂法會

此日びんさゝらといふ事あり、但祭あるは此修

行な隔年

寅、辰、午、申、戌、子。

○十八日

右同社祭禮 これを觀音祭と云、だしねり物あり。

淺草の大通りを見付までわたり、淺草御門の外、神田川にて神輿を船に遷し、淺草川をこぎうかめて駒形より上らせらる、此日專堂、齋堂、常音の三場一社に一人神輿に手を添ふる事古實也、是府外の大祭也。 隔年 丑、卯、巳、未、酉、亥。
右三社祭禮に就ては、「淺草寺」の部に詳し。

四月

和名を卯月と云、卯の花さかりにひらくるゆへに卯の花月といふを略せりと奥義抄に見へたり。

卯月は卯の花月の略なるは、右にいへる如し、昔しは灌佛會に卯の花を賣りに來りしと云ふ。

卯木賣松魚のそばで二文とり

卯の花が咲たで耳のあかをとり
卯の花の雪に干鮫の直が上り
卯の花が咲くと櫻は闇になる

○朔日 更衣 今日より五月四日まで袷を着るゆへ、けふを衣かへといふ、けふより九月八日まで足袋をはかず。

『江戸歳事記』には右へ「庶人單羽織を着す」と附記してある。

衣がへ下女は小袖でくるしさう

○八日 灌佛會 諸宗 前日、卯の花新茶を賣る。

浴佛日といふ此日、佛に香水を灌く事推古天皇の御宇に始ると云。

高僧傳 是日、浴佛するに都梁香を以て青色水とし、鬱金香を以て赤色水とし、正降香を以て白色水とし、附子香を以て黄色水とし、安息香を以て黒色水とし、佛頂にそぐ。

○是日新茶を煮て佛に供し卯の花をさぐ也、又江都にては卯の花を節分の柊のごとく門戸にさす也、上かたには竿の先にむすひて高く上る事也。

卯の花に柊取つて捨てられる

卯の花を捧げる風習は既に廢つたが、關西地方では今尚ほ卯の花の代りに躑躅の花を竿頭に挿して高く上げる所もある。

尚、佛像に香水を灌ぎ、門戸に卯の花を挿すことに就ては、『江戸歳事記』にも、諸宗寺院勤行あり、本堂中又は境内に花の堂を儲け銅像の釋迦佛を安じ、參詣の諸人小柄杓を以て香水を佛頂に澆奉る、在家にても新茶を煮て佛に供し、卯の花をさぐげ、又戸外に卯の花を挿なり、今日佛に供する所の餅を號していたゞき又花くそといふ、年中行事大成に花供御の誤にやといへり、云々とある。

灌佛會の釋迦の尊像の、右手は天を指し、左手は地を指して居るのは人の知る所である。

誕生の指は鯉とほとゞぎす
あれを聞けあれをば食へと指をさし
僧は聞き俗には喰へと釋迦教へ
天はよし地はひだ指の京の釋迦
茶にされた元祖は四月八日なり

行水の始めは四月八日なり
 四月八日は行水の始めなり
 初釋迦といひたき時分御誕生
 御誕生嫁をにらめる眼をあらひ
 御誕生まくりもあげず茶漬にし
 お釋迦様生れおちると味噌をあげ
 お釋迦様生れおちると茶漬にし
 お釋迦様生れおちから茶人なり
 一度づゝ茶にはされると釋迦はいひ
 如月は寐て卯月には立つて居る
 虫よけを讀みよく張るは無筆なり

最終の虫よけの句意は、今日の甘茶を墨に摺り「千早振卯月八日は吉日よ神さけ虫を
 せいばいぞする」と云ふ歌を書いて、逆さに張り置けば毒虫を除くといふ禁呪より來
 れる句である。

『賤のをた巻』に、四月八日には釋迦の誕生とて、小さい盥へ茶を入、中に釋迦の誕生
 のすがたを建、屋根は色々の色紙などにて拵へ卯花などを付、ものもらひの坊主が戸
 戸家々をもち歩行たり、屋敷へも入たり、一錢二錢づゝの散錢を皆上たり云々。と當
 日物貰ひに來た坊主の事を記してある、此等の坊主は賽日には閻魔王の形を拵へて右
 の如く錢を貰ひ歩いたのである。

岡持へお釋迦を入れて持ちあるき
 屋根のある岡持へ釋迦入れて來る
 戻りには釋迦と錢との丈くらべ

五月

和名をさつきといふ、田をうふる月なれば、さなへ月と
 いふを略せる也と奥義抄に見へたり。

『俳諧歳時記』に曰、凡五月の尾より六月の首めに至て、苗種長するを玉苗、民間にて
 苗代と云、これを植んとして、先これを抜くを早苗取と云、農民男女混雜して再び苗
 を挿む、是を田植と云、女子苗を植るものをさをとめと云、各音を揚げうたふ、是を田

歌と云、或は兒童太鼓をうちてこれを勸む云々。

光琳の菊と見違ふ田植笠
 道問へば一度に動く田植笠
 青く日の裏からあたる田植笠
 田植笠かぞへて下る峠道
 ひどい風田植の笠に指の痕
 田を植る嫁泥中のはちすなり
 田植に出すをお見やれと村見合ひ
 の先づちよつと産んでこべいと田を上り
 白つほく田植に嫁の目立つ也
 早乙女の笠ひぼ岡へ持つて来る
 早乙女は二の腕で拭く玉の汗
 早乙女は他領の方へ草を投げ
 早乙女は子を寝かすにも田植唄

早乙女の尻からぬれる俄雨
 早乙女のあをむいて見る大一座
 早乙女を見て居て禿叱られる
 早乙女のかゆい所が泥だらけ、
 早乙女をすゝいでは出す輕井澤

住吉の御田植に就ては「佃島住吉社」の部に記せり。

○梅雨又微雨と書、梅雨出入の説、紛々として一決しかたし、立夏の後庚にあふ日を入梅とし、芒種の後壬にあたる日を出梅とす、又李時珍の説は芒種の後壬にあたる日を入梅とし、小暑の後壬にあたる日を出梅とす、その外説々多し。

入梅の説は『四時纂要』にも、閏人立夏の後、庚日に逢ふを入梅とす、とある。微雨に就ては立春後百三十五日、大概微雨とす、諸物微腐る、此節陸地處々に水かならず涌出る云々と『俳諧歳時記』にある。尙梅雨に就ては、四五月の中梅黄み落んとする時、水潤土溼して柱礎みな朽ち、蒸鬱として雨ふる、これを梅雨といふとある、又さみだれといふはさつき雨降るの略なりと『和訓義解』に記してある。

三味線も風聲の出る梅雨の内(狂句)
 飲み過ぎた壘の酔は梅雨に出る
 年々に餘の儀にあらず降りつゞく
 しめし籠のけて太鼓をあぶるなり
 井戸繩の縫上げをす五月雨
 五月雨に狸も腹の音わるし(狂句)
 五月雨に下女あつくなる火打篋
 ✓五月雨のしめしに困る鬼子母神
 三日程てらくとする五月雨

〔解〕光秀の天下に喩ふ、

五月雨を三日てらすは土岐あかり

○甲、菖蒲刀、人形の市四月末より五月四日に至、ひな市の場所に同じ。

『江戸歳事記』にも、今日(四月廿五日)より五月四日迄宵人形、菖蒲刀、幟の市立、場所は三月の雛市に同じく往還に小屋を構へ、甲宵、上り宵、幟旗、挿物、馬印、菖蒲刀、

鎗、長刀、弓箭、鉄砲、偃月刀、其外和漢の兵器、鐘馗像、武將勇士の人形等を售ふ夜にいたれば燈燭かゝやきてうるはしく買人晝夜にたえす○再刻の江戸惣鹿子に云、通塩町昔は此町にて宵人形細工人多く、塩町人形と號し其製粗なり、價の賤を以て田舎人のもてはやしける、今はこの名をだに知る人稀なり云々○此節より菖蒲刀を賣り歩行く○男子ある家には大かた今日より五月六日迄のぼりを立る、云々とある。

尾張町春はやさしく夏武張り

春は姉夏は弟と尾張町

偃月刀をかゝるくとかひもの

五月のは八十二斤内儀持ち

〔解〕昔龍刀、

惣領だけに牛若や綱が寄り
 次男へはへろく武者に炭斗をつけ
 十人が九人鐘尤か金太郎
 出したたり入れたり高砂金太郎

鐵砲の干魚兜に添へてやり
骨と皮斗り兜へ添へてやり
しわい伯父一年ざりの鎗をくれ
樽拾ひ鍵をかついて使者に来る

△五日 端午の御祝儀 **五雜俎** 古人午五の二字を通じ用ゆるならん、端は始め也、

端午は初五といはんかことし、又云、張九齡が大衍曆を上る序に、謹以開元十六年八月
端午^ヲ獻之、又曰、宋璟か表に月惟仲秋日在^ニ端午^一しかれば毎月の五日みな端午也、然
其本朝の世俗専ら五月を稱す。

○幟 甲 光仁帝天應元年蒙古の賊本朝に来る、早良親王をしてこれを討たしめ給ふ、
親王藤の杜のやしろに祈りて出陣有、時に五月五日、たちまちに神風ふきて賊船たちと
ころに敗走し、たはずして勝つ事を得玉ふ、それよりして當日兵具をかざる事となれ
りぞぞ。

右の説は『諸社根元記』にありて、『近代世事談』にも引用してあるが、國史には何等の
記す所がない。一説には後宇多院の御宇、弘安二年五月五日に、大元の蒙古來りし時、

鎌倉北條家の政務として、天下の萬民に旗を建てさせ其備へとして、今の世まで此風
俗を闕かざるは其時異敵を退けし吉例を傳へ遺す也、昔の時の事には非ず、とある。
江戸に於ける端午の有様は、『江戸歳事記』に家々軒端に菖蒲蓬をふく、菖蒲酒を飲み、
又角黍柏餅を製す、小兒菖蒲打の戯れをなす○武家は更なり町家に至る迄、七歳以下
の男子ある家には、戸外に幟を立、冑人形等飾る、又座蒲のぼりと號して屋中へかざ
るは近世の簡易なり、紙にて鯉の形をつくり、竹の先へつけて幟と共に建る事、是も
近世のなるはしなり、出世の魚といへる諺により男子を祝するの意なるべし、たゞし
東都の風俗なりといへり、初生の男子ある家には初の節句とて別て祝ふ、云々とある。
今は屋外に幟、兜人形等を飾るを略して、單に五月鯉を樹つるに至りしも、其五月鯉
さへ年々數を減じて、風に泳ぐを疎らに見るのみである。

初 幟 追々に来る 諸軍勢
初 幟 源平兩家出てさわぎ
初 節 句 魚木に登るけしきあり
旗 色 の いゝのは初の節句なり

鯉をねらつて斬るやうに鐘尫見え
 夢に見た人相書きを五月建て
 能い星の下へ幟をたてさせる
 安幟ふきんにたわし付けたやう
 幟には女房とかうの望みなし
 幟にも下になつてる母の紋
 嫁手柄里から鎗を突いて来る
 嫁手柄唐のおとゝを軒へたて
 嫁手柄鐘尫で鬼の角が折れ
 お妾の手柄門外からも見え
 お妾の菖蒲刀は切れるなり
 奥様を菖蒲刀で切りなびけ
 菖蒲太刀乳母ごつこいと受けとめる
 唐木綿妾のはしも廣くなり

太平の武者は五月に見る斗り
 子福者は一ト月置て又建てる
 槍下げた向ふからしやうぶく
 餅へ入れたのを男は軒へさし

終りの句は、三月菱餅に入れた蓬を五月には菖蒲と共に軒へ葺くといふ句である、参
 考の爲め左に菖蒲葺、並に菖蒲賣の句を擧ぐ。

菖蒲葺目に立つ草を抜いて下り
 菖蒲葺人にだかれる人でなし
 鶴といふ身で這つて居る菖蒲葺
 笠かぶる程でもなしと菖蒲葺
 隣へも稚子の禮に菖蒲葺
 はごの子の干物を拾ふ菖蒲葺
 これぎりの菖蒲さげ行く放れ藏

菖蒲賣の句は。

年中行事

菖蒲賣取立てといふ足で来る
泥足の乾る頃菖蒲賣りしまひ
江戸へ出て泥足を乾す菖蒲賣
槍賣はみぢんさといふ菖蒲賣
菖蒲刈 鱈汁と は 出 來 心

○粽 **風土記**ニ菰こもの葉を以て稻米をつみ粽とし以て陰陽相包裹して未だ分散せざるに象る、又屈原が故事あり略之。

右にいふ屈原の故事といふは『續齊諧記』に、屈原、五月五日汨羅に投ず、楚人これを哀れみ、此日に至るごとに竹の筒を以て米を貯へ水に投じて祭之、漢の建武中、長沙の殿回白晝に一人を見る、自ら三閭大夫と稱し、回に謂て曰、祭らるること甚だよし、但し蛟龍に竊まるゝを苦しむ、今もし恵みあらばあふちの葉を以て其上を塞ぎ、五綵の絲を以てこれを縛るべし、この二物蛟龍の畏るゝ所なり、と今の人粽をつくり、絲糸及びあふちの葉を帶ぶ、蓋其遺風也云々。とある事にて、粽は屈原を祭る爲めに之を作つて江に投じたのが其起原であるとの説である、尙他に異説あるも頗はしき故

省く。

山 伏 の 内 の 粽 は すぐく見え

二人 扶 持 粽 に 添 へ て 造 り 初 め

○柏餅 かしははめてたきもの也、神代はこの葉に供御を盛り、或はさかつきなどに
もなりし事見へたり、ときは木の中に葉の廣きはかしのみ也、めてたき葉なればこれ
を用ゆと也。

上方の國々にてはさのみ用ひぬ事也、端午にも此事を見ず、東海道參邊の境、猿が馬
場に不斷これを製す、此所の名物也。

むかし端午の節句に、親戚知音へ柏餅を配るのは江戸のみの風習であつたが、後には
京阪でも其初年には粽を配り、二年目からは柏餅を贈る事になつた、其製法は『守貞漫
稿』に、三都とも米の粉をねりて圓形扁平となし二つ折となし、間に砂糖入赤豆餡を挟
み、柏葉大なるは一枚を二つ折にして包之、小なるは一枚を以て包み蒸す、江戸にては
砂糖入味噌をも餡にかへ交る也、赤豆餡にては柏葉表を出し、味噌には裡を出して標
とす。とある如く上戸の爲めに味噌餡の柏餅を作ることは、今も尙は行はれて居る。

葉裏く葉表く味噌と餠
 山椒味噌いづれあやめの柏餅
 大小で配つてあるく柏餅
 太刀をぐわらりと投げ捨て柏餅
 喉ばかりかわく伊勢屋の柏餅
 かみさまをいくらも寄せる柏餅
 辻番へ守が指圖の柏餅
 行まわりかんまわり喰ふ柏餅
 柏餅配つて来ては一つ喰ひ
 柏餅あまくこしらへ内で喰ふ
 柏餅妹の乳母は手傳はず
 おつとり刀で柏餅をくんな

六月

和名をみな月と云、當月は雨ふりがたく水なし月と云事也とぞ。

○朔日 氷室の祝 贈冰節と云、おほやけに氷をぬす事あり、それにしたがひて地下にも氷餅又かき餅やうのものを食す。

仁徳天皇六十二年五月に、額田大中彦皇子、鬪鷄といふ所にかりに出給ひて山に上り、野中を見やり給ひしかは、廣き庵を作りたるやうなる所あり、人をつかはして見せ給ふに、窟也と申、その時かの山のあたりに侍る人をめして問せ給ふに、氷室なりと申、皇子その氷をばいかやうにして納るぞと問せ給ふ、答て申さく、土を一丈あまりほりて草を其上にふき、芦荻などをあつめしきて氷をおさむれば、いかやうなる大旱にもとけず、これをとりて熱月に用るとなん、其時皇子此氷を仁徳帝へ奉らせ給ひければ、はなはた御感ありしよし、日本紀に見へたり、是氷を奉るはじめ也。それより國々に氷室をおかれけると也、近き世まで丹波の奥山に氷室ありけるよし、又富士山、伯耆の太山などよりも奉りし也。

右は朝廷へ奉りし氷室の起原である、後には加州侯藩邸の氷室より、毎年六月朔日に、幕府へ氷を献上するのが例になつた。

御献上御代も手あつき氷なり

御献 上富士さへ青く見える頃
梅つぼを出る六月の御献上
六の花五の花の御献上
水無月に梅に積った雪が散り
梅の室から雪の出る暑い事
六一加賀さん八一は廓の雪

〔解〕六月朔日の氷と八朔の白無垢、

すめる民とて氷まで豊かなり
手紙には氷器に水斗り

○朔日 富士詣 駒込 別當本郷眞光寺。

詳しくは「駒込富士」の部にあり。

○十五日 山王祭禮 長田馬場 別當勸理院 神主樹下民部。

當社祭禮の盛況は、委しく「山王神社」の部に記せり。

△十六日 嘉祥の御祝 〔四季物語〕 仁明のすべらき承和の頃ほひに御代のさか事

をいのらせおはして、加茂上ミの御やしろに奉りて御はらひなごなしめ給へり、六月十日あまり六日なん吉日なるよし、御うらの人々かうかへ申はとてその日おこなはれ、年號をもあらためて嘉祥とものせしかは、なかく此事を嘉祥と年號によりてさだめられしと、當社縣主常幹が日記に侍り。又説、

後嵯峨院即位いまだましまさぬ時、宋の嘉定の錢十六文を以て食物を買て御膳に供したる例を、踐陣の後も件の日に餅など奉ると東見記にあり。

又羅山子の説に、近頃世俗にいひ傳ふは、室町家大樹の時に、六月納涼のあそびのため、に揚弓を射てかけものとし、負けたるもの嘉定錢十六文を出して食物買て、かちたるものをもてなす也、○嘉定は宋の寧宗の年號にて十七年あり、その年毎に鑄たる錢元年より十六年までのしるしあるを、十六錢あつめて今日一人ことのもてなし物の代に定むるなりと云。

嘉祥の祝に就ての説は以上の如く種々ある。此日五色の饅頭並に諸品を土器二枚に盛り、各自紙を以て之を包み水引を以て結び、群臣に賜ふの儀有るは、十六錢を以て求め得る遺意也、と『俳諧歳時記』にある。

昨日象 今日饅頭、の供となり
象の出した翌日饅頭の御拜領

〔解〕 山王祭に廻町から練り物の象が出た翌日、

○廿四日 龜戸天神名越の祓 淺草川にて執事。

名越祓の名とは、夏の略語で夏越祓のことである、不祥をはらひ夏を越し千秋に至らんとするの謂である、龜戸天神では廿四日に行へど、他の諸神社では晦日に行ふのである、『江戸歳事記』に曰、晦日○夏越の祓閏月あれば橋場神明宮、佃島住吉明神社、芝神明宮、神田明神社、新川太神宮、鳥越明神社、五條天神宮、飯田町世繼稻荷社、其他諸神社にあり、神前祝詞を奏し神樂興行あり、神事終りて參詣の輩、茅の輪を越さしむ、河邊に隔りたる所には盥に水を盛りて身會貴川に比するなり○此日庶人紙を以て衣類の形に切て撫ものとし川へ投す云々。

狐釣るやうに名越の神事なり
御祓川七日路行くと天の川
御祓川一夜明けると法の整

東帯で蒲焼をすする御祓川
茅の輪から抜けて踊の輪へ抜ける

○石尊參垢離取 相州大山石尊。

朔日山 六月二十八日より七月七日に至
盆山 七月十四日より同十七日の朝山に至

淺草川にて一七日こりをとりて石尊禪定する也、乳のかぎり水にひたし、ざんげく六
こんざいしやうおゝめにはつだいこんがうとうじ、大山大聖不動明王石尊大権現大天狗
小天狗といふ文を唱へて、もゝ度水をかづく也。ざんげくは慚愧慚悔也、六こんざい
しやうは六根罪障也、おゝめにはつだいは大峰八大也、ことく誤れとも信の心を以
て納受し給ふならん、此事中人以下のわざにして以上の人はなし。
右の如く石尊へ參詣する者は、淺草川で垢離を取るものであるが、家に重き病人のある
時は近隣のもの、川にいたりて祈願をこめ、手にく薬しべを持ちて水中に投じ、流
るれば吉、漂へば凶としたのである。

千垢離に呼出しのない中天狗

千垢離に行くのをこしやじろ
千垢離に抜手を切るは他人なり
千垢離の泳ぐと岡でかんをする
千垢離を取る內衣うばひ取り
千垢離も二十人のが一人ぬけ
相模まで聞えるやうに垢離を取り
夜の内に臺まで行くと垢離を取り

〔解〕 神奈川縣

屋根船の唄千垢離につぶされる
井戸端であびるは變ンのかはつたの

抑も、相模國雨降山、大山寺は、江戸を去る事十八里、良辨僧都の開基にして、眞言宗高野山に屬す、寺領百四十八石内百石不動御供料 四十八石願學料別當八大坊坊舎ともに十二坊脇坊六軒外に大勸進御師あり、本尊不動明王次に前不動石尊大權現は二十八町山奥の頂にありて、傍に大天狗小天狗の社あり、常は參詣をゆるさず、此月に限りて登山をゆるす、故に

遠近より諸人群をなし道中宿々晝夜往來絶えず賑へること甚し、梅酔にて染たる手遊びの竹鎗、挽物細工等を土産とす、當月登山の事は寶曆の頃よりはじまりしといへり云々と『江戸歳事記』にある。

水の無い月に雨降る山は明き

參詣の輩は廿五日の頃より江戸を出發し、心願ある者は納め太刀と謂つて小きは七八寸、大なるは丈餘の木太刀に「大願成就」の四字を書いたのを神前へ納め、其代りとして餘人の納めた太刀を持歸つて守りとするのである。

朔日山又初山とも云は前記の如く六月廿八日からであるが、盆山は七月十四日から開けるので、借金逃れの爲めに參詣する横着者もあつた。

盆山に一筆たのむてんば下女
盆山は欠落らしいなばかり
十四日油断をする山へ抜け
十四日拔身を脊負つて夜道する
納まらぬ盆を納める太刀で逃げ

とゝをば山へかゝあは内で言譯ケ
 しよせん足りないど大山さして行
 精靈と女房を留守に急な旅
 盆前は天狗倒しにされるなり
 さんげく借金で参りました
 さんげく大黒を盗みました
 さんげく間男をいたしました
 さんげく藤澤で遊びました
 藤澤で抜身の分は右へ切れ
 大瀧は一言ンもない所なり
 大瀧でさんげくをぶちのめし
 大瀧は根性骨を丸あらひ
 長局なんたる願で納太刀
 二の足で間男の買ふ納太刀

おさまらぬ天窓でかつぐ納太刀
 切先を揃へて渡る田村川
 吉廣を月夜に買ふは急な事
 吉廣は冬はうたない刀鍛冶
 亂髪で吉廣をぼツこんで行
 木ク刀のすぬけ親分持て居る
 親分とつれ立て行く初の山
 明日立つと土場で切り火でのんで居る
 石尊は土場からすぐに思ひ立ち
 石尊へ貸元投げろく〜なり
 石尊は貸元最眞あそばされ
 石尊へ立つに二タ口切りかへる
 石尊へ信心で行く貸した奴
 石尊で龜の子程に見えるなり

石尊で見れば山號甲を干し

〔解〕江ノ島の山號を金龜山といふ、

問ふに落ちず石尊で懺悔する
問ふに落ちず石尊で語るなり
「どうしたか山歸り以後入のよさ
山歸りあたり近所は笛だらけ
山歸りそうく女郎宿やめる
仲條は山の荒れたでこりくし

七月

和名を、ふ月といふはたなはたに文をかすとてひらくゆへにふみ月とも又ひろげ月とも云。

○朔日より晦日まで本所羅漢寺に毎朝羅漢供養盂蘭盆經、梁皇懺法。

詳しくは「羅漢寺」の部にあり。

○七日 七夕祭〔荆楚歲時記〕七月七日織女牽牛聚會の夜也〔周處風土記〕七月七日其夜庭

を灑掃して露を几筵に旋し、酒脯時果を設け香粉を河鼓織女に散す也、其外諸書にくはしよつて畧之、○本朝にては孝謙天皇天平勝寶七年に乞巧奠はしまる。

七月の節句は酒が無銘なり

此日童子小女のわざに、五色の紙を色紙たんさくにたち、歌を書て若竹の笹にむすび高くさくけ七夕に手向也、是をたんさく竹と云ふ、此事上方の國かたにてはなし、梶或は桐の葉に歌書て川へ流す事あり。

梶の下書 芋の葉へ書いて見る
梶の葉はよんごころなく散らし書き
梶の葉は椎の木程に洒落れは無し
梶の葉よりも椎の葉を人は知り

『守貞漫稿』に、近世大阪にては手跡を習ふ兒童のみ五色の短冊色紙等に詩歌を書き、青笹に數々附之、寺屋と號る筆道師家に持集り七夕二星の掛物をかけ、太鼓など打て終日遊ぶこと也、江戸にては兒ある家もなき屋も、貧富大小の差別なく、毎戸必ず青竹に短冊色紙を付けて高く屋上に建ると、大阪の四月八日の花の如し、然も種々の造

り物を付るも有、尤も色紙短冊はともに半紙の染紙也、如此江戸にて此事の盛なること及び雛祭の昌なるは、市中の婦女多く大名に奉公せしものごもにて、兎角に大名奥の眞似をなし、女に係る式は盛なる也、故に男の式は行れず形ばかりにて、女式は昌也。作り物昔は家々自造して興とす、今はは、づき形、帳面の形、西瓜を切りたる形、筆形等、又枕の引出しより文の出たる形などを賣る、然れども稀に自作して種々の形を付する者往々有之、作り物多くは竹骨を用ひ紙を張る云々とある、寶曆の頃、吉原では客の定紋を切り抜いて短冊と共に籠へ結びつけたさうである。

今日家々で冷索麵を喰べるのが慣ひである。

短冊の外は鉄の細工過ぎ
翌日は機に居眠る女七夕
七夕に虎の出さうな長局
七夕は無筆紙撚をよつて居る
七夕は川を渡りて濡れ給ひ
七夕は土手から見える紋目なり

臨時の物入り土手からちいらちら
百人の助けで七夕早くなり
秋がはき先づ七夕にかはきそめ
色紙の付くのは若い男竹
色紙の序で素麵買にやり
素麵の邪魔して洗ふ硯石
四方から筆を突込む天の川
天の川瓜蒬子に未だ足はなし

〔解〕 精靈棚の供物、

一トとせに一夜は牛も大よだれ (狂句)

秋一の出合牽牛織女なり
悪筆のやたら流れる八日過

○十日 淺草寺四萬六千日參 此日一たび參詣すれば此日數にむかふといひつたへて參詣の輩はなはだ多し。

『守貞漫稿』に曰、昔は諸所観音に詣す、今は淺草にのみ大群集す、観音欲日と號けて毎月一日有之、或は百日に當り或は幾千日と毎月不同、又毎月十日に非ず、其中今日のみ四萬六千日に當る故に今は今日のみを知て他月を知る人稀也云々。

龜 四 疋 鶴 が 六 羽 の 御 縁 日

○十三日 王子祭 毎年あり 若一王子權現 別當金輪寺。

詳しくは「王子神社」の部に述べたり。

○十三日 精靈の供物、青物くだものあるひは器物等の朝市、五丁三丁の間に立つ、江府諸方。

草市は普通十三日の朝立つのであるが、吉原では十二日未明から十三日の五ツ半まで大門口から水道尻まで商人が店を列べて魂祭りの調度を齎したのである、尤も吉原のみならず、深川櫓下、根津門前其他二三ヶ所でも十二日から市が立つた。『江戸歳事記』にも、十二日、草市、又盆市ともいふ精靈祭り魂棚飾物の市なり、何れも卯の刻より始る鼠尾草、麻がら、白黄の茄子、まこも、瓜茄等にて作りたる牛馬、燈籠、其他種種の供物、供花等商ふ草市やかむろが袖にきりくす作者不知、吉原仲の町、深川櫓下、小

石川傳通院前、本所四ツ目、根津門前。云々とある如く、十二日には僅かに數ヶ所で市が立つたのみである。

草市はひだるい腹の人だから
草市はみなまぼろしのもの斗り
草市は佛の好かぬ場所に立ち
草市はたいがい百であるつもり
草市に茶屋の内儀に百借りる
草市に禿買ひたいもの斗り
草市に禿ひやうたん買ひたがり
草市に桔梗の切れる仲の町
草市に張合ひのない月行事
草市につるべた錢は取らぬなり
草市にうろたへてなくきりくす
草市へ嫁は着替へて叱られる

草市へ眼脂だらけな顔で来る
 草市へまけるくど日があたり
 草市へ出る三尊の美しさ
 草市ではかなきものを直切りつめ
 草市を見物に行く門徒宗
 白茄子草市以後は遂に見ず
 粟稗も精霊だけに坊がつき
 今に日があたると粟坊を直切り
 精霊の馬の目利きは下女にさせ
 むしろ燈心までも賣る草の市
 尙十二日には、魂祭りの飾物を市中へ賣り歩く商人も來たのである。

燈籠賣やんま追ひく歸るなり
 芋がら賣かつぎ働きたか提げて持ち

○十三日の夜より十五日まで、三夜がうち燈籠でうちんを灯す、新精霊のある家は、六

月晦日より七月中、三とせの間これを灯す、中元に燈籠を燃す事、後堀河院寛喜の頃は
 じまりしよし定家卿の明月記にあり。

『守貞漫稿』に曰、今世は三都ともに、七月朔日より晦日に至り燈を點じ、又八月も三
 日迄繼之を無縁法界の爲也とし、又京都にて或は明智光秀の爲めと云ふは、逆賊なれ
 ども京都の地子錢を免せし報恩の意を云ふ也云々。

洛中は光秀信士とぼすなり
 今以て三日にあげず京でほめ

右の如く近世は七月朔日から燈籠を點したのであるが、昔しは新佛のある家では、六
 月晦日から七月三十日まで、三年或は七年の間、高燈籠を立てたのである。

高燈籠の事に就ては『用捨箱』に、新見翁著『昔々物語』を引用して、高燈籠の「立やうは
 六月晦日長さ五六間の杉丸太、上に三角のいらかを結び、松の葉にて包み四手をきつ
 て付、燈籠は辻番の行燈の形にちひさくこしらへ、上ひらき下すばませ、屋根も板に
 てこしらへ、玄關と臺の間の廣みに建て、七月朔日より晦日まで毎夜暮六ツより明六
 ツまでとす、一向宗にはみえず、他宗はみなくかくのごとし、哀れにみゆるなり

とあり、是享保十八年に記されしなれば、既に當時在家の高燈籠の絶えたるは明かなれど、いつの頃までありしか知らず云々。とあるを見れば、江戸では古くより廢つたものと思はる。

四五日は引手の多い高燈籠
高燈籠はるく虫の死に所
高燈籠ひくいはごうかまけのやう

尙古川柳に多く咏まれてある、吉原の燈籠の句は、「新吉原」の部に述べてある。

○十五日 中元と云道經七月中元の日、地官下降て人間の善惡を定む。

○盆中諸寺施餓鬼修行○本朝孟蘭盆の供養する事聖武天皇天平五年に始まる。續日本紀ニ見孟蘭盆經佛告目蓮十方衆僧七月十五日僧自恣時當爲七世父母及現在父母厄難中者具飯百味五菓汲灌盆器香油樵燭牀敷臥具盡三世甘美以著盆中供養十方大德衆僧有供養此等自恣僧者現在父母六親眷屬得出三塗之苦應時解脫衣食自然若父母現在者福樂百年若十世父母生天自在化生入天華光矣。

孟蘭盆と云ふは、天竺の語で烏藍婆拏と云ふのが本義であるが、漢譯すると烏藍は倒懸といふことになり、婆拏は盆と譯し救器といふことになる、則ち孟蘭盆とは救倒懸の意である、救倒懸とは恰も人間が手足を縛られて暗黒の中に倒しまに吊されて飢渴の苦に逢ふ如く、死して餓鬼道に生を享け倒懸の苦に逢ふを救ふに、法器なる救器則ち盆に甘露の法味を盛りて其苦しみを救ふ事で、其法會が救倒懸會即ち梵語の孟蘭盆であるといふ。

孟蘭盆の起りは、釋迦の大弟子、目蓮尊者が、其亡母を救つたのが始まりである、右孟蘭盆經にもある如く、目蓮が六通の悟りを得て、亡母乳哺の大恩を報ひんと思ひ、亡母の所在を觀じ玉ふに、餓鬼道に生を享けて飢渴の苦に逢ふを見て、大に歎き悲しみ椀鉢に飯を盛り亡母に餉しめた處が、其飯忽ち猛火となり遂に食することを得ぬので目蓮は泣き悲みて釋迦に救ひの法を求めた、釋迦の曰く、汝一人の力にては救ふ能はざるべし、七月十五日は衆僧自恣の日とて、懺悔滅罪をなす喜びの日なれば、其機を利して孟蘭盆會を設くべし、而して過去七世の父母及び現在の父母、厄難の中にある者の爲めに百味五菓を盆器に盛りて供養し、且自恣の衆僧の悲願力によりて汝の母も

亦生天を得べしと教へ玉ひしより始つたとの説である。

目蓮はかうばしさうな母に逢ひ

當月は諸寺院で任意の日に水陸會を修行する。近世十六日廿五日晦日に大施餓鬼を修行し、川施餓鬼今はなしと『江戸歳事記』にはあれど、川柳勃興當時の寶曆天明度は、川施餓鬼が盛んであつた事は、古川柳に施餓鬼船の句の多いのを見ても知ることが出来る。

大施餓鬼してから後妻氣が輕るし
はんぞうを親枕にする大施餓鬼
施餓鬼船事おかしくも堀へつけ
施餓鬼船松を置く場に飯を置
施餓鬼船ふるいけんぞくごつたく
施餓鬼船だれかつかつて叱られる
施餓鬼船切れた三ンなど落て居る
川施餓鬼嫁物語り船が着き
聲色は誰れだど叱る施餓鬼船

お船はぎつちらことつまる川施餓鬼
又施餓鬼うせたと藝子弾きたてる
婆アは川へ洗濯は施餓鬼なり
折よくも土左衛門が來て施餓鬼なり
七月の屋形うばそくうばい也
たまくの屋形にいとこはとこ迄
あつたら船に坊主だの婆アだの
屋形船先祖のかげで初に乗り
船頭も兩親菩提二まいつき
おしい船いろ紙の旗ひるがへし
へんぼんと靡くと吉野仕舞なり
下化衆生積むと吉野は仕舞なり
あはれにも面白いにも吉野丸
お寺にも御殿にもなる吉野丸

老込むと後生を願ふ吉野丸
 折くは精進もする吉野丸
 ばッア遠手前のあごで吉野也
 吉野丸抹香臭くしてしまひ
 吉野丸銅鑼鉢鉢でぶつこはし
 吉野丸降つてもと僧借りに来る
 吉野丸は「兩國橋」の部で述べた如く、夏季に於ける遊山船であるが、秋季になると他に用ゆる途がないので、あはれ右の句の如く施餓鬼船に利用され、冬季になれば大根などを積込まれる迄に落ちぶれて了ふ。

踊り子のあごへ練馬のせなあ乗り
 冬の内荒業ざをする吉野丸
 千住川吉野の通る寒い事
 吉野丸小べりでさすさ寒く成
 屋形船小べりでさすさ寒く成

屋形船姿を變へて一ト稼ぎ

前記の如く施餓鬼は寺院の意に任せて、當月中に修行したものであるが、在家では盆中靈棚を飾つて、魂祭りをしたのである。

『四季物語』に、魂祭るとは一年に二度あるものから、わきて此月(七月)の祭りは年のをよりよりも、いやそひてかなしうおもはる。とある如く、往古は七月及び十二月の二度、靈棚を飾り設けて、精靈を迎へ祭つたのであるが、後世十二月の魂祭りは絶えて、専ら七月のみ行ふこととなつた。靈棚へは掛素麵、麻柯まがしの箸、枝豆、さゞげ、根芋、青蕎麥、秣米、瓜、茄子等を供へるのである。

盆棚はみんな畑の月足らず
 靈棚の牛は畑の鼻まがり
 靈棚に院號のない恥かしさ
 靈棚をはだかで拜み叱られる
 裸御免と靈棚の膳を下げ
 叱られた事も戀しき魂祭り

仲の町精霊も氣の張る所
掛取りの來ぬが精霊への馳走
はたられるのが亡き靈へ氣の毒さ
精霊と女房を留守に急な旅

〔解〕 大山詣り、

靈棚の牌前で菩提寺の僧の誦經するのを棚經と稱へる。

棚經をかんでうらいに誦んで行

棚經はあたまを叩き／＼誦み

い が栗が落ちて棚經飛び上り

なま出來な所へ棚經もうしかけ

○小町踊 十二三以下の小女、帯、腰帶やうの物を襟にかけ褌とし、團扇太鼓とて團扇のことくなる太鼓にて拍子をとりにて諷ふ、おどるにはあらずたゞむらかりてあゆみ行く也、男子は此事をなさず。

小町踊は、戀踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、など、同じく盆踊りの一種で別に七夕踊

といふのである、『還魂紙料』に、正保の頃の畫卷に、七夕踊の圖を載せて、其詞書に、「さても七月七日は、天上に天の川とて深き廣き川あり、一年に只今宵ばかりは、牽牛織女の逢夜なれば、かさゝぎの紅葉の橋を渡して、契り深きなかだちをなし給ふとかや、乞巧奠とて、人みな今宵は七夕祭するものなまめかし、こゝに七ツ八ツばかりなる小姫たち、美しく出立、太鼓を手毎に持つれ面白くうたひ踊りまはるも、みな是七夕をなくさむる事、昔今に怠らずとかや」とあり、案に七夕踊とて別にあるにあらず、小女の人情に盆を待ちかねて、七夕よりをざる故の名なるべし。とある如く、小町踊は、小女等が盆を待ちかねて七夕の夜から踊る一種の盆踊りであるとの説である。踊りの起原は『昔言故事』に、王子醉はじめ瀬可を平らげ、軍士にをしへて訝鼓戲をなし、遂に世に甚だ行はる、子醇西人と對陣せし時、軍士百餘人に命じて訝鼓をなさしめ、隊の軍前に出す、虜見て驚き愕く、遂にこれを撃ち破る云々。訝鼓戲とは樂人雜劇をして跳ること、世人皆之れに倣ふたとある。江戸の盆踊りは踊るといふよりも練る練り歩くといふのが適當である、六歳より十歳ほどの小女をさきだちに列べ、十一二歳より十四五歳の娘は其次に二た列びとなり、

十五六歳より十七八歳までの娘や子守は五六人其あとに立ち列んで乳母を軍師として前後に備へを配り、盆唄を唄ひつゝ、隊伍整々と練り出すので、他國の如く、揃ひの着物で音頭を取つて踊り廻るのとは趣きを異にする。

盆踊り是非なく乳母も地を唄ひ
盆踊り子を背負つたのが頭分
盆踊りもふちつとのが音頭とり
盆唄は首二つのが音頭とり
あくたいの見習ひに出る盆踊り
休む内太鼓であふぐ盆踊り
生醉にぼんくつらを亂すなり
月へ投げ草へ捨てたる踊りの手

○十六日 閻魔參正月に同じ○此日、東、増、淺、三山の山門ひらく。

正月十六日閻魔參の部を参照せらるべし。

○廿六日 芝高輪の海邊にて月を拜す、此夜月輪の中に三尊の來迎ありとて、老若こ

ぞりて月の出しほを待つ、此所の外、深川の海邊又は湯島神田の臺などの高き所にも待つ者あり。

詳しくは「高輪」の部に記せり。

八月

和名を葉月と云、木のはもちておつるゆへに葉落月を畧せるよし奥義抄にかけり。

○朔日 八朔の御祝儀 たのむの祝 後深草院建長の頃より此事あり。はじめは田の見とて米を折敷かはらけなどへ入れて人のもとへつかはしけるとそ。又後嵯峨院若宮にてまししくし時、御閑素をなくさめ申さんとて近習の男女ひそかに奉りしか、其後御位につかせ給ひしかは御嘉瑞なりとて内々御さたありけるともあり。羅山文集昔は此事なし四百年來特に佳節とす。

『俳諧歳時記』には。凡毎月朔日は吉日にして、相賀すると中華に同じ、今日殊に八朔と稱し、又恃怙の節と稱す、又憑の節供といひ、或は田實の節と稱す、又田面の節と號す。中世農民稻の初穂を禁裏に献ず、故に田の實の節といふ、世に又其訓を借りて、

憑の節供と稱す。蓋君臣朋友相依て頼むの義に取、君臣朋友の間互に贈答の義あり、今日貴賤各白帷子を着し、互に慶びを修す、云々とある。右にて八朔の御祝儀の起原を畧ぼ知ることが出来るが、徳川氏の世となつてから江戸で八朔を祝ふに至つたのは、家康が江戸へ入城したのが、天正十八年八月朔日であるから、八朔を佳節として祝ふこととなつたのである。

八朔の古例を聞けばさのみなり
きつとして出る八朔は寒く見え

往昔、八朔に貴賤白帷子を着たのは、八月の節を白露といふに依る歟との説がある。此日吉原の遊女も一般に白小袖を着て、仲の町へ出たのである、遊女の白小袖を着けることに就ては左の如き二説がある。

古來遊女は端午の節句に染地の袷を着、八朔の祝儀には白き袷を着る風俗であつたが、寛文の初め新町宗玉の抱へ夕霧といふ太夫の、一と歳寒かりし八朔に、豫て仕立置きし白小袖を着たのが、他の遊女の袷の肌寒げなるに引替へて著しく目立つたので、其翌年の八朔には殘暑烈しきにも拘はらず遊女は一般に白の袷を廢めて白小袖を着たの

が、年毎の例になつたとの説と。

文祿年中、江戸町一丁目巴屋源右衛門の抱へ高橋といふ太夫が、七月の末より瘧を患ひ病ひの床に臥して居たのを、其頃深く言ひ交はした客人が、八朔の紋目に見舞旁々來たので、高橋は病後寢衣姿の白無垢で揚屋入りをした態は、李花の雨を含める風情にて一入美しく、其日入り集ひたる萬客の話柄となり、高橋の容姿を嘆賞するに至つたので、翌年の八朔には巴屋の妓女ども、高橋を真似て新らしき白小袖にて道中し、遂には他家にもうつりて吉原の遊女一般に白小袖を着るに至つた。

との以上二説がある、眞偽は遽かに判ずるを得ぬが、後説の方が世人に普ねく傳はつて居るのは。

白無垢でとかくさむけがしいすなり
病人を祖とし八朔衣更へ

きつい事病後のなりが道具なり
の句を見ても明らかである、されど予は前説の方眞に近きかと思ふ。

八朔は人まねこまね更衣

八朔はわが有ツたけ白くなり
 八朔に四郎兵衛至極いゝ名なり
 八朔は金鶏鳥も驚になり
 八朔の雪ころばしは客がする
 八朔の雪は積らぬ總まがき
 八朔にたいこくやみもふるいやつ
 八朔は黒助で居るつらい事
 八朔に涼しいといふ仕合さ
 八朔の雪は吾妻の香爐峰
 八朔が百姓よりは苦勞なり
 八朔をゆるして天をしよはせたり

〔解〕 八朔の後月見の紋日、
 八朔をのがれて扨の無いをくひ
 運のよさ此八朔は模様もの

地女の八朔涙ぐんだ顔
 影ぼしも八朔からは太くなり
 富士の夢先づ八朔をくらつたり
 八會目あたり白無垢しよつて来る
 白無垢の裏から切れる弱い客
 白無垢をぞつくりぬいで蚊帳へ入り
 白無垢でしほれた草を見てあるき
 みんぐが鳴くに白無垢ぶつ重ね
 丸綿を着ぬ白無垢のおもしろさ
 丸綿を着せぬ斗りの紋日なり
 米屋でも傾城屋でもの日なり
 傾城は一日白き苦をもごめ
 傾城を太白にするいたい事
 傾城は一ト月早くぶつかさね

傾城もあたりはづれの秋が有り
 新造まで廻は降り足らぬ秋の雪
 空とおやぢには知られぬ秋の雪
 當日の祝儀八朔すさまじい
 雪女郎遠暑かろとお針いひ
 雪女郎買ひに旦那は出られやす
 居続けは白妙さまのお客なり
 白妙の雪は積らぬ總まがき
 白人と江戸も一日云ひたい日
 〔解〕大阪島の内及び北新地の遊女を白人と云へり、
 一日は稻荷が黒い斗りなり
 時ならぬ禮服を着る五丁町
 おもしろさ夏と冬の衣裳なり
 何とうらやましからうと客帷子

帷子で来るを小袖で待つて居る
 帷子の下へ紅裏着て歸り
 面白い雪見は扇づかひ也
 面白や燈籠化して雪となり
 燈籠がすむと空おそろしく成
 燈籠のあしたまばゆき仲の町
 燈籠がなくなつてから八ツ着る
 風のまへ日に燈籠は消えるなり
 嵐の日客さむさうに見えるなり
 月ごこか風をくらつてもふ逃げる

前記の如く、八朔には白無垢を着るので、吉原附近の仕立屋や妓樓のお針は七月中、
 白小袖を縫ふのに忙殺される。

掛無垢のやうに旧町でやたら縫ひ
 白無垢を田町で縫ふと残暑なり

白無垢を五六の中であけて居る
 朔日の雪物指でつもるなり
 丈け四尺くらゐにつもる秋の雪
 暑いのお針手おもしろものを縫ひ
 女郎衆はさぞと大汗かいて縫ひ
 七月が小でお針のいそがしさ
 七月は小だと造手氣をつける
 僅かに一日の粹を誇つた白無垢も、あはれ翌日は質屋の蔵に隠れる。

八月二日大雪と質屋いひ
 八月の二日質屋へ雪が降り
 八月の二日見馴れた形りになり
 八朔の雪解は八月目に流れ
 白無垢は三月流れ申候

○十五日 名月 こよひは歌人騷客の晴を期するの夕なり。野穂に羅山子の云、今宵

の月を遊ぶ事大かた李唐よりさかんにして、詩人文人其詠おほし○今宵の詩歌書つくし
 かたし。

續右今 月ことに見る月なれどこの月のこよひの月に似る月をなき 天曆御製
 むかしは三派の月見とて船にて大川へ出たのしめる事あり、今は稀なり○今宵月見團
 子とてだんご芋をみそに煮て月に供す。

月に供へる團子を味噌煮にしたのは、昔しの事である。近時は一升の粉を以て團子を
 十五作り、單に蒸かしたのを、机上の三方に盛つて供へるのである、京阪では小芋の
 形に尖らせ、餡或は豆粉に砂糖を加へたものを衣として供へる、婦人若し不淨の時は
 粉も挽かず團子も丸めず、他のものが代つて拵へたのである。

お月見を亭主に十五丸めさせ
 大屋から鐵砲玉が十五來る
 故障の儀あつて亭主が白を挽き
 姑に月見挽かせる氣の毒さ
 白の禮袂と帯をはたくなり

あとの戸を頼むと白を借りて行き
挽臼の唄を見世から笑ひに来
おとなしくなると團子の汁を喰ひ

尙月前へは團子の外、御酒、芒などを供へ、清光の隈なきにうかれて船を浮べ、或は酒宴を催ふして音曲絲竹に興し、或は雅薙を開いて詩歌柳俳に心を寄せるものもある。

名月に御用發句をしたといふ
名月の生酔晝の氣で歩き
名月や暗い所は見世斗り
名月のお尋ねものは美しい
月更けて下戸のあはれはひだるがり
月に又御座れと柴の戸をたてる
良い月にきぬ引かつぎふし玉ふ
良い月夜神樂を吹いて二度通り
良い月夜やつたら知つたものに逢ひ

話しでもしなは淋しい月見なり
雨おちへすてるはけちな月見なり
寐るはさて惜しいはけちな月見なり
晝のやうだと蛤の壳を捨て
月見客筆を噛みく扱出来ぬ
大屋から救使をうける月見をし
盃を芒へはさむふるいやつ
樽拾ひ芒を抜いてそりやと出し
たくはへは草庵に只月一つ
村月見頭をたれて芋を喰ひ
武藏野へ澄み切つて出る月と玉
薄墨の竹を障子に月が書き
信濃から来て名月を一つ見る

今宵は吉原の大紋目で廓中の賑ひは一方ならぬ、妓樓は柿、芋、團子、枝豆、栗など

を堆く三方に積みて月に供へ、遊女の部屋には七草の造り花を飾つて秋の野を寫すもあれば、木を植ゑ山を築きて提灯をつるし、或は硝子の玉籠を掛けて蒲團棚を飾るもあり、小供芝居、操り人形などを招いて全盛を競つたのであるから、洵に極樂淨土の美觀を目のあたり見る心地がしたらうと思はれる。

是等の費用はすべて馴染客の懐ろを惱ますのであるから、遊女は月見前から手管をめぐらして客を操り、或はぬを送つて月の座を約束するのである。

― 寝かさない 晩案の定月の事

― もつとこつちへ寄せといて月の事

盆後から下手にさわると月の事

嘘を書きつくしたあとに月の事

傾城の蛾眉をひそめる月の前

傾城も月のさわりは除き得ず

月の前かこち顔なる賣れ残り

月の枕言葉 苦勞でありいす

月見前ごうを招きに息子行き

信心なお方へ月を割付ける

さいめ言天にあらば嵐の月

頼んでる月へ生憎三會目

そら定めなく變換への月のぬ

三日月の頃から數通書いて出し

月までにぬの來ること十五たび

月のぬ長さは凡そ十五ひろ

月の座があいてゐんすとぬが來る

月に來て呉れるだらうと封を切り

ぬを受取つた馴染客は、其日の黄昏を待ち兼ねて或は猪牙に乗り、或は鬘を飛ばして吉原へ志したであらう。

月夜だに質屋歩いて行けといふ

とび乗りく漕ぎ出す月の暮

四ツ手から出る時月を一つほめ
 四ツ手駕月の都をさしてかけ
 掛け聲で月宮殿へ乗ツつける
 やつさいいと桂男を乗せて行
 きおい三重で駈けてく月の駕
 二千里も行くほど氣張る月の駕
 早打にまけず月見の四ツ手駕

此の如くして馳せ参する姫客の状態と、家庭の有様は、下記の句に據て想像すが事が出来る。

身ン上の傾く迄の月を見る
 敷ふればよつぼご月に遣ひ捨て
 ありんす國の月を見るいたい事
 いたい事月の上座へ直される
 いたい月早く御目にかけるとこ

膽の大きき斗の如く月見なり
 一チ客にこがねの月輪ぐわんを出し
 黄金の月の輪を出す仲の町
 月の座へ招けば月を振舞はれ
 月の座へ息子はひらき直るなり
 月ふところに入ると見てごら生れ
 仲秋はごらに實のいる時分なり
 仲秋の頃大ごらを愚息うち
 月の光でしつけ芋を息子とり
 釜よりは親仁良夜に眼をぬかれ
 惣花を芒のわきで渡すなり
 吉原で招く尾花はむつかしい
 冬の月よりも恐ろしき月を見る
 二朱は二朱だけに傾く月の客

月花はおやぢ小言の定座なり
 しよいものゝ内へ月をも入れて置き
 花にめで月にうかれておん出され
 内の月では妄執の雲晴れず
 女房はすつぽん女郎お月さま
 女房の苦は花が咲き月がさし
 妻捨の月は世間にある習ひ
 月を閉て出して女房は小言なり
 苦の世界女郎買ひにも月や花
 海よりも田の面の月がひんがよし
 賣色に月花を結び大不首尾
 風まけもせず十五夜を仕廻ふなり
 いものある客が月見を仕廻ふなり
 月を仕廻ひついでに出見世を仕廻ひ

月見る月は此月のむづかしさ
 月明かにして星はかくれたり
 親父の耳へもれ出づる月の事
 花よりも團子のごらが大き過
 八月と師走吉原こわい所
 芒では手も切れ指も切れる也
 今夜行くやつもあらうと芋を喰ひ
 雲ほごに女房は月にさしさわり
 月以來女房野心をさしはさみ
 月見過馬鹿が鉄砲打つたやう
 白塗りの戸を月見過たてゝ置く
 月もはや影傾いて朝歸り
 山の神團子を投げ朝歸り
 朝歸り團子と芋をつきつける

つんとして女房團子、を焼て居る
吉原斗り月夜かど女房いひ
右の如く家庭に風波を起し、果ては身上を傾ける迄の月見であるから、約束を履行せぬものも多くあつた。

いゝ客とみつればかくる月の謎
月の嘘天に偽りなきものを
約束がすぼんとちがふお月様
逃げる客芒の穂にもおちるなり
猿猴の月だと逃げるけちな客
水に教はつて月見を逃げるなり

○十五日

放生會 八幡の諸社祭禮 いづれもだしねり物あり。

深川八幡

隔年

丑卯己未酉亥

市ヶ谷八幡

隔年

子寅辰午申戌

田町八幡

隔年

子寅辰午申戌

西窪八幡

隔年

高田八幡

隔年

子寅辰午申戌

澁谷八幡

隔年

丑卯己未酉亥

『俳諧歳時記』に曰。八月十五日放生會あり、養老四年九月征夷の事あり、大隅日向の兩國逆亂す、よりにて宇佐の宮に祈請せしめ給ふ、その禰宜辛島勝馬豆米の神軍を率ひてかの國を征し、敵を討て利あり、大神託して曰、合戦の間多く殺生をいたす宜しく放生會を修すべしと、諸國の放生會こゝに始る、云々とある。

快くとんで行はと養老四
うれしさの木に突きあたる放し鳥
ニツめは子にねだられる放し鳥
座敷牢出したさに母放し鳥
握つてゝたひ状を乞ふ放し鳥
慾のありたけ聞て飛ぶ放し鳥
放し鳥こしのぬけたはほり上げ
放し鳥そばでほしがる後生樂
放し龜一日宙を泳いでる
放し龜元トは鶴から思ひつき

放し龜やつこをふつて日を暮し
 すつぼんのつくく思ふ放し龜
 善人があるので龜はむごくされ
 憎らしさ鰻を二疋放すなり
 毒づかれまいと鰻を先づ放し
 放し鰻も太いのを姑ゑり
 放し鰻も太いのを撰つて居る
 戒名を鳥に聞かせて放すなり
 放生會いづれもそれに御座りませ
 放生會ぬくめた方を鷹は見す
 諸鳥にうさを晴させる放生會

九月

和名を長月と云は、夜やうくながきゆへに夜長月といふを畧せるよし奥義抄にしるせり。

○朔日

今日より八日まで袷衣を着す、九日より絮衣かたがねを着す。

むかし木綿わたのわたらない以前は、庶人の冬の衣服には布に蒲蘆あしの穂わたを入れて着た故、綿入れの事を布子と稱へたのである、又おひえといふ別名もある。

傾城は一ト月早くぶつ重ね
 暑い事袷を八日ぶつ通し
 綿入は飲んで酒着る男あり
 綿入がなせおひえだか解せぬなり
 寐た内におひえを一ツつい丸め
 去つた後綿入物の仕立かけ
 下女色に布子を入れて呉れといふ
 下女口舌布子の袖をしぼるなり
 茶屋女まんまご布子仕立たり
 ずつと古渡りの布子を番頭着る

▲重陽の御祝儀

九は陽數也故に重陽と云、九をかさぬると云ふ心なり。

○菊酒 九月九日蓬餅を食ひ菊花酒を飲む、かくのごとくすれば人をして長壽ならしむ。

重陽は何にも立てぬ節句なり

○十三夜 後の月と云 衣被きんかづきはむかき栗、枝大豆、等を供す。

夕霧卷 五月の頃夕きりの大將小野よりかえり玉ふところにて、十三夜の月のいとほなやかにさし出ぬれば、小くらの山もたどるまじうおはする。

つれく草 八月十五日、九月十三日は婁宿なり此宿清明なるゆへに月を翫ふ良夜とす○又菅神宰府にて十三夜の御詩作あり、されは往古より翫びぬるにや。

今日を後の月見とて貴賤興遊するは、延喜年中宇多法皇始めて十三夜の月を賞し給ひしより、世々の節物となつたとの説がある。

衣被ぎ延喜の御代に喰ひ始め
みことのり代々に曇らぬ後の月
手入らずの芋で眺める後の月
いろくな入れ物の寄る後の月

後の月衣とさやとは捨てるなり
後の月一人くにごみを出し
後の月嫁氣にかけて爪を出し
十三夜嫁氣にかけて弾じたり
十三夜琴は月への馳走なり
あさつてはあのあたりから月が出る
あさつてはお初月ッ忌と後の月

『吉原大全』に、十二日、十三日、十四日は、月見とて八月に同じ、但し片月見を忌みて明月にしまひたる客は後のをも約束するなり云々。とある如く、昔時は江戸の風習として、八月十五日の観月に他家に行て酒食を饗せらるゝか、或は泊ることなどあれば、必ず九月十三日にも行て再び酒食を饗せられ、或は泊ることをなさいれば、片月見と云つて互ひに嫌つたものである、殊に縁起を祝ふ遊女の如きは最も之れを忌み、十五夜に來た客へは固く後の月見を約束したものである。

十五夜は跡札の付く紋日なり

されば情波に漂蕩せる息子共は母と争ひ、父の目を偷みて、二度の月見に骨を飛ばせ
ぎ、すまぬ顔にて室内に蟄居するはよくく不首尾の手合ひなるべし。

北國の團子を息子二つ喰ひ
年に二度息子も月の障りあり
月二つ息子社稷を傾ける
月二つ息子太儀を思ひたち
五三の通ひ息子はゑらい事
若旦那八九とつゝき大仕事
十五兩十三兩と二度のどら
きつい事十五夜及び十三夜
秋の夜を二十八日息子しよひ
月宮殿へ二度のぼるいたい事
二度目には月も親仁もすぐ見え
太白月を貫いて二度奔り

物いまいだけに月見を二度くらひ

〔解〕物いまいとは御幣擲きの意、

後ト月の芒がごうか招くやう
後の月叔父の手際にもふゆかす
後の月時なるかなとまげるなり
後の月又候かやうくなり
後の月再應の儀と親仁いひ
後の月すまぬ顔にて内に居る
そこで親仁が腹を立つ後の月
氣にかゝりやすは勝手な後の月
客星の光り失ふ後の月
十三夜手本があつていたい事
きつい事同じ枕に十三夜
片月見息子少しも氣にかけず

片月見だアなと母といぢり合ひ
 片月見ごくく悪るい首尾と見え
 心外とやいはん息子片月見
 白衣より玉兔二つでこなになり
 軒の燈籠後の月に金が入り
 三塔の勇僧月を二つしよひ
 月二つ出家けんごにまかり越し
 八月はあばれ九月は影もなし
 もてぬ筈八月にげて又にげる
 十五にも居ぬと十三にも居ない
 春は花に戯むれ、秋は月に浮かれ、家財を蕩盡しては、昨日の大盡も今日の乞食となり、大通化して野暮となるは世の習ひなれど、部屋住みの身は親の勘氣を受け、懲らしめの爲め、銚子の濱に配所の月を眺め、或は座敷牢に幽囚の身となつて、浮世の儘ならぬを歎するに至るは是非なし。

斯うなつた由來は月のあしたなり
 左に勘當及び座敷牢に関する句を掲げて、參考に資せん。

懲らしめの爲めに稻毛の伯母へやり
 罪あつて息子銚子の月を見る
 銚子からさすらへの身と洒落た多
 左遷の身だと銚子でまだ洒落る
 の、様を二度請合つて銚子なり
 後の月盃の無い銚子なり
 後の月生きた鱈で飲んで居る
 東國行脚に赴く後の月
 九月十四日干鯛の船に乗り
 銚子への路銀に拂ふ銀烟管
 羽二重はいやと銚子の質屋いひ
 いたはしや息子銚子の帥になり

獵師仲間へ入り候とどらが多
 當分は鹿島詣りと母はいひ
 又銚子言葉と母に呵られる
 今でこそ笑へと銚子話しなり
 銚子をも見た親方でわけがよし
 月のおつばに勘當を親仁つけ
 麥飯できたへ直して嫁を取り
 麥飯のあどあやまつて改まり
 親類のもちあまされは麥を喰ひ
 勘當も初手は手代に送られる
 勘當を許すと菜を喰ひたがり
 勘當の訴訟のたしに髭がなり
 勘當を許して口が二つふえ
 勘當は蛙に水のかけ納め

勘當は雪か雨かの揚句なり
 勘當の羽二重で居るぶはたらき
 勘當を麥で直して内へ入れ
 勘當の一日二日帆かけ船
 勘當も二夕銚子めでゆりかねる
 勘當をしても母親ゆすられる
 勘當へ持つて失せうと銀烟管
 勘當はぬけ裏などもくからず
 勘當をどうく母はしそこなひ
 勘當のゆきたけ母のそらづもり
 勘當の内恐ろしいよみに成
 勘當の内にかるたが大當り
 勘當の四五軒先きで妻を去り
 勘當の赦りた祝ひに又こける

勘當の見習ひに出る舟ゆさん
 勘當を呼ぶで吊ひ三日延び
 勘當の内江戸中の湯に這入り
 勘當が村の祭りの師匠なり
 勘當が跡甚七がものになり
 勘當が救りて八さん稽古する
 勘當も一人他人でてつきばき
 勘當は往生づくめ救すなり
 勘當は扇でぶつが故實なり
 追刻ぎのやうに舞臺で勘當し
 妹と聲と勘當詫びるなり
 未明に和尚勘當の詫びと見え
 はせをの上で勘當を救すなり
 あばた得心で勘當救る（狂句）される

茶飯にはなると勘當場をかたり
 中宿は義理で勘當二日置き
 からたち成つて勘當救るすなり
 ✓ 辭世の側に勘當はうづくまり
 烏帽子親勘當の時救ふ役
 夜あそびに出てはかんきを受ける筈（狂句）
 近所には居らまつて居て母をはぎ
 近所には居るなど母は二兩貸し
 江戸に居やよとお袋みれんなり
 壹ツの功をたてやれと母のみ
 親分は大きな捨子拾ふなり
 ✓ 死顔を他人で拜む不孝者
 出て失せう汝元來蜜柑籠

次に座敷牢の句を擧ぐれば、

座敷牢大工を入れて、めて見る
 座敷牢出入りの大工辭退する
 座敷牢跡月からの越度なり
 座敷牢鳴呼月われを亡ぼせり
 座敷牢うらやましくもすめる月
 座敷牢女房の方は手がらなり
 座敷牢手代も一人り宿預け
 座敷牢腰繩で出る十三日
 座敷牢目黒の罰と母はいひ
 座敷牢初手は遊里に捕はれる
 座敷牢薬をのめに油断せず
 座敷牢たゝませて置くいやな氣味
 座敷牢母も手錠がものはあり
 座敷牢身につかないと根津へ行

座敷牢時に范蠡伯父き也
 座敷牢番頭なきにしもあらず
 座敷牢母二三日留守といひ
 座敷牢通ふつばさを入れて置き
 座敷牢酒をのませて母不首尾
 座敷牢多を届けて母不首尾
 座敷牢珠數をねだつてこはがらせ
 座敷牢九月しまとは母の慈悲
 九月しま牢普請さと大工いひ
 あはれむべし息子は座敷牢
 桶伏せと入かへにする座敷牢
 昨日青樓今日座敷牢
 お袋の留守に仕上る座敷牢
 牢へ顔出して持參を母すゝめ

我内の入牢馬鹿げたやうに見え
ごらの入物てきばきとぶちつける
伯父の目にも涙座敷牢の詫び
むごい事息子は内で座敷持
藏へする給仕親仁は知らぬぶん
つけ焼の團子で母は牢見舞
後の月すんでに牢を破るところ
朝歸り座敷へ傳馬町が出来

○十四日より十六日迄 芝神明生姜祭 世俗めくされ市と云。

市の産は山物の小櫃丹ろくしやうにて臼杵子供のもてあそびもの土生姜 秋のくだ物。

月のはしめより在々所々の生姜、日毎に馬につみて來り、社の方二町がほとは生姜の山をつくり、參詣の輩いつれはなくともせひともせうかは求める也、泰山をあさむく生姜、三日かうちに一莖も残らざるは誠に繁花のしるし也。

右生姜市に就ては「芝神明宮」の部に詳記したれば参照せらるべし。

○十五日 神田明神祭禮 湯島 神主 芝崎宮内。

當社の盛況は、「神田明神」の部に委しく記せり。

十月

和名を神無月と云は、諸々の神出雲の國に行て、こと國神なきゆへに、かみな月と云と、奥義抄に見へたり。

○出雲の國にては、神在月と云、又神月としいへり、神在の浦に神在のやしろ有、諸神、これにあつまり給ふと、調林采要抄に見えたり、しかれどもいつもの國にてもかみな月といふよし、かの國の人の云へり。

『俳諧歳時記』に、此月諸神出雲國大社に集りたまひ、男女の縁を結び給ふといふより、神送り、神の留守、神迎等の事あり、とある。只蛭子神のみは夷講の爲めに残れるにや。

神無月 賽 錢 箱 の 肉 が 落 ち
神無月 まさか 櫛 も 賣 れ ぬ なり
神無月 一人 残 つて 笑 つて 居る
殺生が 好きで 神無月 に 居る
釣にく つたくして 出雲へも 行がす

年中行事

神たちの留守に恵比須のねだり喰
三郎の曰く拙者はお留守番
大社九郎助洒落れて叱られる
大社立聞をして見たい所
大社あの牡丹餅に獅子ツ鼻
正直の頭十月軽るくなり

右の如く諸神、出雲に集る故、神無月といふのが一般の説であるが。十月は純陰の月なれば、雷の聲のをさまりはつる故に、無雷月とはいふなるべし、萬葉集に、神のごと聞ゆる瀧、とよめるも後撰集に「ちはやふる神にもあらぬ我中の雲井はるかになりもゆくかな」とよめるも雷神なり、伊勢物語に、神さへいといみじうなりと云々、神なるさわざに云々、此外猶証歌おほし考へてしるべしと、『年山紀聞』にある。
此月上亥の日に炬燵を置き、爐を開く風習あり。

疊屋をはしたにつかふ神無月
十月の疊屋はした仕事なり

亥の日から猫の居所高くなり

▲上亥ノ日 御亥猪御祝 御大手此夜篝火をたかる。

御もちるを賜ふ。御亥猪はいのこの餅の名也。いのこの事説々あり、公事根源延喜式四季物語源氏にも子のこの餅はいくつかまいらせんいのこのあくる日なり。○或人の云、極陰の月極陰の日なれば、餅を食ひて陰氣をさくるとなり。

此日餅を食するとに就き『政事要略』には、豕は多子なる者なり、毎年十二子を生む、閏年には十三子を生む、故に婦人これを羨みて此日に至り餅を供して神を祈る、とある。其起原は詳かならざるも『近代世事談』に、攝津國八木村(大阪より七里北)門太夫と云ふ土人、數代住す、毎年家の餅を御調物とす、清淨の火を以製之、餅に赤小豆を入れて搗く幅四寸長六寸五分、深さ二寸の筥に入、上に五角の栗五つを貼す、初亥の日百箇門太夫よりさく、中の亥の日は、大丸村の里中より献す、末の亥は切畑村の里中献す、亥兩日の年は切畑村を除く、山科の土人來りて京都へはこび、亥の刻禁裡へ入る、その箱をわかち給ひて、江都に至る、此例凡そ千年におよぶと云、八九十年以前、兩年懈怠ありしかば、不祥ありしゆへに、亦舊例にかえると云。とあるを見れば古くより

行はれたるものである、後世武家にも公の例にならひて、白赤の餅を家臣に賜はり町家にては牡丹餅を製して、亥の日を祝ふやうになつた。

牡丹餅のど、交むりする神無月
牡丹餅の精進落は亥の子なり
牡丹餅も精進落を亥の子にし
おかしさは持參亥の子に見合ひなり

○二日 上野大師のおねり、毎年此月御本坊へ入せ給ふ。

詳しくは「東叡山」兩大師の部にあり。

○六日 十夜 浄土宗諸寺勤行、同十五日に至る。

六日より十五日まで十日十夜法要の事は、白河の女院、宮中にてはしめて勤行させしめ給ふ、そのころ後花園帝永享二年、伊勢守平朝臣貞經父子、此法會を中興あり、其後明應四年、武州品川願行寺の開山觀舉祐崇上人、勅に應じて京師に入、十夜の法會を浄土宗にて、執行する事をゆるされ、鎌倉光明寺に歸り、はじめておこなふ、浄土の諸寺にて修行するの始め也、と『近代世事談』『守貞漫稿』等に記してある。

双盤の鳴りやむころに珠數を摺り

双盤のひしげた所で御十念

双盤が鳴りやすと嫁舌を出し

十夜から餘程よりかど母は聞き

飛んだ事十夜を南もん日なり

僧侶を第一の顧客とする品川では、十夜の法會をも紋日の數に入れたであらう。

○十三日 御影講 日蓮宗諸寺勤行 ○同日 池上參り。

八日より十三日まで祖師を祭るのをおめいかうといふ、委しく「雜司谷」の部に述べたれば略す。

○廿日 惠比須講 諸商人これを祝ふ。

十月は十萬兩がめしを喰ひ

惠比須講十日過した面白さ

付聲で惠比須の鯛は嫁へ賣れ

詳しくは正月惠比須講の部にあり。

○お取越 一向宗一派 十一月は兩本願寺に法會あれば、末寺或は在家取越す。

親戀上人の忌日、十一月には兩本願寺で開山忌をするので、末寺或は在家の門徒は十月(日不定)取越して法事をするのを、俗におどりこしと稱へる、此日男は幅狭き肩衣を着け、女は薄もの、つのかくしをかぶつて參詣する。

田舎間の肩衣ならば御取越

○芝居役者入替り番附賣 當月晦日堺町茶屋、商人其外芝居かゝりの者大晦日に同じく事を極め、翌朔日を元朝の心にせり。

番附賣は芝居の替り目毎に賣り歩いたのである、假令ば河原崎座の番附ならば「かはらさき、やぐらしたばんづけ」と云ひ他座も之れに準じて賣り歩いたのである、分けて顔見世狂言の番附は賣聲も勇ましく賣れ高も夥しきものであつたので、この一日だけは直段も甚だ騰貴した。

一日の違ひ一分が十二文

當日は堺町を初め、葺屋町、木挽町の三町は、大晦日の如く、夜に入りては積み物、飾り物等を見んと集まる者雜沓を極めて、立錫の餘地なき有様である、此夜當所を通

行する婦女は老若を撰ばず、衆人其女をかつぎ上げて狼籍を敢てしたのである、天保以後芝居町が猿若町へ移つてからは、雜沓もせず惡習も止んで了つた。

八百五町はつねていの晦日なり

番附の代門番にちよつと借り

番附の錢を御門で乳母借りる

番附で嫁おはぐるを煮へ付かせ

役者附ケ中より上はなんぞ持ち

役者附ケ嫁どれ見せなく

十一月

和名を霜月と云ふは霜ふり月を略せると也、○周の代は、十一月を以て正月とす。

『月令廣義』に、通鑑云、武王既勝殷乃改正朔以建子月爲正月とある如く當月は周の正月になるといふ所から、十一月の異名を周正とも稱する。

閑亭流の書初めは周の春

〔解〕共に顔見世の句である。

○朔日 芝居の顔見世。

『江戸歳事記』に曰、朔日、三座芝居顔見せ狂言興行、臘月十二三日頃に至てこれを止む、十月晦日曉八ツ明より、太夫元若太夫吉例の三番叟を初む、終りて前夜の人々を入れかゆる、扱七ツ時より前狂言脇狂言色子子役大勢の大踊り終りて後、新狂言顔見世の始りなり、都て芝居にあづかる者は大晦日に同じく、十月晦日に事を極め、十一月朔日を以て元朝のころになせり云々。

顔見世中は役者及び芝居に關係ある者は、正月に擬し雜煮を食して祝ふのを例としたのである。『守貞漫稿』に、江戸は大概無缺年顔見世の式あり、十月十七日よりそめと云ふ事あり、寄初也、二十日より紋看板を出し、十月晦日より初日の時繪看板に懸替る、顔見世初日前より三芝居とも大小茶屋の庇上に種々の木偶を飾り置き、號けて飾り物と云、木偶大小あれども大略二尺計一戸に木偶三四を置く、當時の當り狂言を摸し、或は家號に因ある物、其他種々無定、又積物には最良より役者に贈る所の酒菰

樽、米俵、炭俵、薪等を屋根と均しく積重ね、又菓子蒸籠をも積む、蓋是等は金子にて役者に與へ、蒸籠は損料がりにて空器を積むのみ、酒樽も此類なり。とあるを見ても昔しの顔見世の如何に盛んであつたかを窺ふ事が出来る、されば婦女子の如きは、化粧に仕度に、夜の目も寝ずに見物を楽しみ、暗い内から出掛けたのである。

朝霧で櫓の見えぬ時分行き
棧敷のはざれも跡月結ふた髪
霜月の化粧粧十月髪を結ひ
霜月の朔日丸は茶屋でのみ
顔見世へ旅立のある亂がしさ
顔見世が見たいと云つて舌を出し
顔見世のお供はざれも籤づよし
顔見世の木戸番首がさかさなり
顔見世に顔を見せぬは馬の脚
顔見世と見える女中のゐるきつき

顔見世の娘は曾我に嫁で来る
神は歸らせ玉ひけり三番叟
神くの御歸り濟んで暮が明き
御講の前に面白く一度着る

〔解〕 御講小袖を顔見世に着る、

御講へも餘程引けると木戸でいひ

○八日 吹革祭 鍛冶、鑄物師、傍、白金細工すべて吹革をつかふ職人、此日稻荷の神を祭る、俗にほたけと云、此夜子供あまた鍛冶が軒にかつまり、ほたけくとはやせり、柿蜜柑をなげて子供にあたふ。

ほたけは火焼と書く、今日未明に二階の窓より往還へ蜜柑を投げて子供に拾はせたのである、吉原では火防の爲めに庭へ投げて、禿などに與へたさうである。

今日、稻荷を祭る事に就ては『牛馬問』に、むかし三條小鍛冶宗近劔を造るに、いなり山の埴を取て刃をやくに、最すぐれたりし故、此埴を取るの神恩を謝する爲、此神を祭、時々稻荷山へ詣でたりし其遺風なり、とある。狐の合樋で刀を造つたといふ俗説

は、これより起つたのであらう。

手をあぶりながらほたけの禮をいひ
蜜柑をも尻にあたらぬやうに投げ
品川のほたけ一日投げて居る
つぶれない蜜柑持つてる五軒の子

〔解〕 向ふ三軒兩隣り、

○十五日 髪置 三歳の小兒今日より髪を置き初る也、白髪と名付て一名たすきかけと云麻苧真綿に末廣松梅の作り花を、五彩の水引を以てかざり結び、かつがしめて氏社へ詣るなり、五歳は袴着、七歳は帯解此さしよりひ帯を取或は元服、初鉄漿此日を用ゆ。

元服及び初鉄漿に就ては後に述ぶる事とし、先づ髪置の事に就き『滑稽雑談』に載する所を抄出すれば、凡そ綿帽子の尺なるを兒にかぶらしめ、是を白髪綿と稱す、其壽いのちながからんとを祝するものなり、その綿の置たる半ばを金箔を以て彩りたる太き元結にて結ぶ、これを童頭髻と云、又藪柑子といふ赤き實を、その髻に結付るもあり、末廣扇を兒に持たしめ、吉日を撰み産土神の社へ詣づるなり云々とある。

後には右の風俗は廢れ、産土神へ賽するのは専ら十五日を用ゆることなり、貴賤に依り貧富に應じて、新調の衣服を着飾らせ、或は手を引き、或は肩車に乗せて、參詣の途次親戚の家々を廻らせ、其夜は客を招いて祝宴を開いたのである。

髪置は白髪の種類を蒔き初め
髪置は乳母もどつちりものに成
髪置に乳母もどつちりな髪を出し
髪置の櫛させば落ちさせば落ち
三ツから日本は國のなりに結ひ
とつさまと寐る髪置はやせつぼち
鯛煮た鍋で髪置三ツ喰ひ
袴着にや鼻の下までさつぱりし
袴着た初心むしやうに手を入れる
袴着に裝束付けが二三人
袴着のどうだましても脱がぬなり

よんやさくと袴着は上り
十六で産みつゝがなく袴着せ
ひとつとんだりと袴着つるし上げ
とんだりくと袴着をつるし
十五日猿廻し程辞義をさせ
鰐口へすつともつてく十五日
かたくとへ二本ふんごむ十五日
七五三とはめづらしい十五日
出づかひのやうにして行く十五日
二人りして振袖を着る十五日
方ウぐの花嫁になる十五日
かゝさまによく出来やした十五日
禮服で乳をのんでる十五日
縫紋を乳をのみくむしる也

鶴も居る龜も居るしと乳母はほめ
 こわめしが足袋や雪踏に化けて來る
 子の祝ひ夫婦喧嘩の一つなり
 十六日もべゝ着ようく
 肩車嫁入ほどな仕度なり
 肩車店子などへは下りぬなり
 十五日江戸で争ふ肩車
 櫻田の窓から覗く肩車
 帯解の繼穗になりし肩車
 帯解は半分人が着て歩き
 帯解は男を尻に敷き初め
 帯解は濃き白粉の塗り初め

次に元服及初鉄漿に就いて述べんに、古は月代を剃るとなく髻して初めて烏帽子を頂
 くのを元服と云ひ、烏帽子を與へ名を付くる人を、烏帽子親と稱へたのである、烏帽子

は首の服で、首は始即ち元である所から元服といふとの説である、近世は上流の人を
 除くの外、一般に童形を脱する証として、男子は先づ前髪を剃りて、半元服といひ次
 に鬢髪の際を剃りて角を入れ振袖をとむるのを元服としたのである。

烏帽子親 勘當の時 救ふ役
 烏帽子親 會我一件に口をとち
 烏帽子親 祖父の敵も討てといふ
 前髪を列んで落とす 呉服店
 元服をならべてさせる 呉服店
 元服も一ごきにする 呉服店
 元服の毛うけは母が立まはり
 元服は異見を添へてほめるなり
 元服の仕着せ 松坂越へたなり
 元服の甚だ遅い 根津の客

女子の元服は、初鉄漿をつけ眉を剃り髪を丸髻に更むるのであるが、眉を剃らざるもの

も稀にはある、之れを半元服と稱へたのである、武家の新嫁は、齒を染め鬚を更へても眉を剃らざる半元服のものが多くあつた。

『守貞漫稿』に、京阪は新婦の時かね付て眉を剃らず、島田鬚の者も懐妊すれば大略眉を剃り鬚を改む、又未嫁も大畧年二十餘になればかねをつけ、また年と人品に應じて眉も剃り鬚も改むる、蓋京坂年若と雖、嫁す者は必ず齒黒す、江戸は嫁しても年十五七の者は齒黒せず、是前に云如く齒黒すれば丸鬚にする故也、丸鬚は年長て見るを厭ふ也、江戸も未嫁女も年十八九になれば、大畧眉を剃り齒黒すること京阪よりは早し云々。とある如く、既婚の女子も年齢に依て元服を延ばし、未婚の女子も場合に因ては元服を早めたものである。

水茶屋もすんで七所から貰ひ

初鉄漿をつける時には、七所から鉄漿を貰つてつける風習があつた。右の句は見合の後、無事に結婚が済んだといふ句である。左に元服以外、妊娠其他すべて鉄漿に關する句をも列擧して参考に供する。

お齒黒を俄かにつけてとがゝ知れ

お齒黒はしくくかぶる内につけ
 お齒黒をつけて了へと婆ア來る
 お齒黒も何もかも嫁休みなり
 お齒黒の仕舞ひにこはい舌を出し
 お齒黒を醬油のやうにあてがはれ
 お齒黒を貰ひに行つて綿を入れ
 お齒黒に禿廊下を練つて來る
 お齒黒にぢろりと禿にらめられ
 お齒黒をつけく禿にらみつけ
 お齒黒の駄賃に一本しやぶらせる
 お齒黒の尻へ抱つてだいをいふ
 お齒黒の邪魔はだまつて叩かれる
 お齒黒は藝子一生いやといふ
 お齒黒の口をひんもぐやうに拭き

お齒黒へ下女うかつて解せぬなり
 お齒黒のそばで返事を開けて見せ
 お齒黒を酔か酒しほのやうに買
 お齒黒の口は左右へちつと振り
 お齒黒の邪魔鼻先へちよいとつけ
 お齒黒の小言餘ッ程口がさけ
 お齒黒の廻りにおきを下女ならべ
 お齒黒におつたてられるかぢけ坊
 お齒黒をつけて娘は野暮になり
 お齒黒をくんなど顔をもふかくし
 お齒黒壺へぶちまけて元結あげ
 飯焚はお齒黒壺でいちり合ひ
 やゝ暫しあつてお齒黒返事する
 愛想に先づお齒黒の唾を吐き

さあのきなさいとお齒黒あたゝめる
 自身にはお齒黒つける事ばかり
 持參金お齒黒獅子のやうにつけ
 もふひけとお齒黒やからかつちかち
 黄ナ粉つけ／＼お齒黒をつける也
 きたあない形りでお齒黒賣りに來る
 初のお齒黒に見物二三人
 初鉄漿をむつてつゝの氣で嫁はつけ
 初鉄漿はお茶湯ほごに並べたて
 初鉄漿はぼちく／＼とした顔に成
 初鉄漿に乞食のくれた名をかへる
 初鉄漿の粹女推量で恥しさ
 鏡見て染め物をする恥しさ
 嫁はもう黒吉になる恥しさ

伯母が来て黒吉にする恥しさ
まつ黒なくちやくをする恥しさ
はんぞふで黒染をする恥しさ
房楊枝横に動かす恥しさ
楊枝で一度剃刀で恥しさ
恥しさ丸一へ唾初にはき
鉄漿の禮覺えて居なと歸る也
鉄漿の禮ざりや見やうぞといやがらせ
鉄漿の禮歸ると跡で是れだこよ
敷をよくなぶられて來る鉄漿の禮
だアレかゝ居やすと歸る鉄漿の禮
いよつんとしましたといふ鉄漿の禮
ごこのかみさんだとなぶる鉄漿の禮
只でさへ笑ひやだのに鉄漿の禮

笑はれて來やせうと出る鉄漿の禮
肝腎の禮を云はずに逃げて行き
能い娘情しい事には齒が黒し
只さへもけんな娘に鉄漿をつけ
お袋と半いさかひで黒く染め
吉日がそこらまで來て鉄漿をつけ
公家ならばどうしなると鉄漿をつけ
飛びくに鉄漿を貰つて憎まれる
へつゝいの前へこゝんで下女が鉄漿
鉄漿にかこつけ庚申を嫁は聞き
鉄漿つける下女くれなるの舌を出し
鉄漿つける替女を覗ひてこはくなり
替女の鉄漿口惜しさうに見て貰ひ
よしなよと替女おはぐるの肱で突き

聾かど覗けば鐵漿をつけて居る
 そうやくをせねば見られぬ鐵漿の口
 一トひきひかせなと黒い口でいひ
 眞ッ黒な口で世話しい子ではある
 眞ッ黒な楊枝を捨て、叩きつけ
 付いたかど齒ざしりをして見て貴ひ
 覗かれて顔をつゝ込む耳盥
 耳盥紙澤山が嫁のなり
 兩耳のないので内義かねをつけ
 さし汐に氣味合のあるかねをつけ
 われ鍋を隣りへもやる女同士
 うつかりと齒磨を出すつけたあす
 後家の齒を色あげさせる一家の衆
 是程飲んだら酔ふとかねへ入れ

次に元服の眉並に留袖に關する句を擧ぐれば、

元服も二夕剃刀は女なり
 元服も後のはごうかおしいやう
 目の上をぞりくくとおしい事
 もみ上とつきかへの毛をおしい事
 わづうかな毛をすつことすおしい事
 髷めるものを剃落すおしい事
 しわよせるものを落すのおしい事
 流石は女眉どるを替女おしみ
 丸顔のおも長になる恥しさ
 わづうかなぞりくくをする恥しさ
 恥かしさ富士の裾野が廣くなり
 恥かしさ毛請で顔をかくすなり
 片眉毛落とすと嫁は手でふさぎ

かた／＼を残りして嫁を笑つてゐる
 目の上へ兩手をあて、嫁送げる
 花嫁をニ々剃刀でらりにする
 坊主にもされる思ひで嫁濡らし
 半元服で乳ッ首のにくらしさ
 もう一度着てどめたがる嫁の袖
 し、喰つたむくひで惜しい袖をどめ
 愛嬌の無い振袖は内、でどめ
 縁遠さ庄屋木綿の袖振らせ
 氣にするも道理十九で袖を振り
 元服の時、振袖を裁つて短かくするを、江戸にてはとめるといひ、京阪にてはつめる
 といひし由なり。

○廿二日より廿八日に至 御講 一向宗勤行東西本願寺に詣す。

此日の間兩門跡の御堂におゐて、聽衆に齋非時さいひじをすむ、一宗の老若御講小袖と名付、

あ、ら、た、に、衣、服、を、調、へ、終、日、參、詣、す。

『俳諧歳時記』に曰、廿八日、親鸞上人の忌日なり、上人は内丸の後胤、藤原の有範の男、伯父範綱養ひて子とす、字は善信坊名は綽空、又範宴と更め、初め慈鎮を師とす、後源空の弟子となる、弘長二年十一月廿八日寂す年九十一、淨土真宗の開祖たり、東西本願寺十一月廿二日より廿八日まで報恩講を修す、京江戸在家宗門の徒、參詣群集す、或は御霜月と稱す、又御講と云、昨今時として天氣快晴なり、俗にこれを御講風といふ云々。

法會中は一宗の老若仕立下ろしの御講小袖を着、男は幅狭き肩衣をかけ、女は薄もの
 の黒き頭巾俗につのかくしといふを被り、東雲の頃から寺前に群集し總門の開くを待
 つて本堂へ詣づる者、絶間なき程雑沓を極める、中には參詣を名として見合ひの爲め
 に娘を伴ふ母もあれば、彌陀にかこつけて菩薩を買ひに行く親爺もある。

阿彌陀を賣つて新造を買に行き
 阿彌陀へ詣る娘錢はご光り
 阿彌陀様濟度しかねた大あばた

御奇特によう御詣りと仲人いひ
 後生願ひのふりをして見合ふなり
 見立きまつた善男子善女人
 他宗だか倅に拜みもせぬ見合ひ
 いゝ天氣續いたあゝで嫁になり
 築地からついて来て聞くいゝ娘
 娘の顔見世もあたりはづれあり
 顔見世で見立お講で直が出来る
 ありがたい事いゝ嫁をめつけ出し
 四五年も御講に目立つ縁遠さ
 世の中の姿は御講限りなり
 持參金無駄な御講へ度々參り
 肩衣であれさゝと仲人し
 肩衣で女房を化かす門徒宗

肩衣で見なすつたのど新枕
 肩衣できりのごたつく木挽町
 肩衣をかけ百せんを喰に行き
 いそがしい勤め肩衣かたへかけ
 販やかに精進をする本願寺
 御講日和に賽錢の雨が降り(狂句)
 俎板へ千人程の人だかり
 半纏で御講の留守にひよろり来る
 朝事から戻り大根の菰を取り
 二十九日から仲人やたら来る
 二十二日にしつけ取るいゝ着物
 お講の前に面白く一度着る
 節季候がもうさと御講崩れいひ
 節季候は御講崩れの邪魔になり

節季候は御講のしまひ始めなり

節季候は報恩講の終りの日即ち二十八日から出る乞食である、其扮装は昔は編笠を以て面を覆ひ、寶蓋など描きたる紙の前垂を掛け、破りたる竹を兩手に持て是を叩き、唯しながら祝詞を唱へて門口に踊り込むのである、『守貞漫稿』には、毎歳臘月中旬頃より非人乞食等二三人各々紙の頭巾をかむり、白紙の前垂に松竹梅等を畫き、小形の太鼓を打ち、さゝらをすり「せきぞろござれや、ハアせきぞろめでたひ〜」と最も喧しく戸前に呼びて錢を乞ふ也、繁多の時節故衆人困て錢を與ふ云々とありて、十二月中旬頃より出るやうに記してあるが、『江戸歳事記』には、十一月二十八日、今日より、節季候出る、米山翁が世事談に云、せきぞろは筑前國觀音寺の追儼の姿を學ぶといへり、元祿三年開板の人倫訓蒙圖彙に、節季候は都鄙にあり、都には十二月二十日より出る、節季にて候へば、くるとしの福と又年の終まで何事なく送りかさねしを祝ふ心なるべし云々、とある。右に據て考ふるに、節季候は字の示す如く、節季にて候の意なれば昔は歳末より出たのであるが、後には十一月末より出るやうになつたものと思はる。

節季候の笠上下でかぶつたの節季候が引負の胸いためさせ節季候に別れて乳母は泣き出されみんないひ切ると節季候やめるなり

○酉の日 葛西花又村鶏大明神の祭市立 三ツ有レバ三日共ニ市立。

酉の市の光景は「鷲大明神」の部に述べたれば略す。

○此月信濃冬奉公人來る 信州は雪國なれば、冬のたつきなし、その間江都に出て奉公し、あるは又斗り炭などを賣て營とす、來るとしの二月の末みな歸國す。

信濃者江戸と國とは雪と炭
商賣も國と江戸とは雪と炭
女房を雪に埋めて炭を賣り

江戸へ出る信濃者は、三々伍々群れをなして來る故、俗に之を椋鳥と稱へる、彼等は多く飯焚、米搗などの勞役に服し、骨身を惜しまず働くだけに、食事も亦人並勝れて居たので大食家としての句が多い。

米搗に所を聞けば汗を拭き
米搗のなんにすねたか二杯喰ひ
米搗におめしといふと帯を
米搗はみごをくはへて腰をかけ
米搗を二人とあてゝ米をどぎ
米搗は真ッ赤なやつを二ツ喰ひ
たばこ入から唐辛子搗屋出し
唐辛子搗屋の貰ふすばらしさ
あをむいて見ては米搗ひだるがり
お内儀に問はれて搗屋三つぶ喰
張物の杭を舂屋が打つてやり
杵へ茶を置いて米搗汗を拭き
薪ざつば持つて米搗さゆをのみ
臺所の敷居へ搗屋腰をかけ

蓋をせぬ搗屋喰ひく呵るなり
げつふうをしてから搗屋二杯喰ひ
錢だけに搗屋しらけを厭ふ也
不意に來た搗屋で二人ひだるがり
焼たてのこはだ搗屋へ馳走なり
物まうを搗屋見かねて肌を入れ
布引に通るで搗屋ふるまはれ
おつけさへあればと搗屋汗を拭き
下直とや云はん搗屋へ刺身なり
三ツ四ツ搗いて搗屋は一ツぬぎ
三作ほごあてゝ搗屋は布子ぬぎ
かいごりを搗屋四五十ついでぬぎ
あを向て搗屋さんまをふつり喰
脇腹を抱へて搗屋休むなり

初松魚搗屋呼びつぐ斗りなり
 下女は又出て搗屋ごんさめるわな
 めしの時搗屋衣裳をつけて喰ひ
 なんにしる搗屋が喰た跡の事
 ぶつかへりさうに搗屋は畏まり
 二代目は搗屋に門トを叩かれる
 あてこともないと搗屋に起される
 皆汗に出ますと搗屋のんで居る
 似たやうで杵屋と搗屋大違ひ
 三度が三度親枕で搗屋喰ひ
 松の供譜代恩願の搗屋なり
 連れないにやおとりと信濃供につれ
 二人連れたさに信濃に狭み箱
 狭み箱には信濃をとあて、置き

小所で信濃を置いて喰ひぬかれ
 姨捨てを信濃に聞けばいもで居る
 引抜に信濃の伯母も捨てられず
 五六杯くらつて姨を捨てに行き
 捨てられた姨も全体くらひぬけ
 市の供信濃ひたすら願ふ也
 喰いぬいて来やうと信濃國を立ち
 銀烟管拾つた信濃いもで居る
 鳥の骨信濃に聞けば捨てました
 安ものゝ米失ひは信濃なり
 冷飯の方から信濃片付ける
 猫の分信濃たびく断はられ
 喰ふが大きいと信濃を百ねざり
 人並に喰へば信濃は安いもの

たべる外信濃わるぎのない男
 關取と信濃を呼ばる飯時分
 切れた三持たせ信濃を買ひにやり
 食するに語らず信濃五六杯
 どれ程喰つたか信濃腹がくちい
 耳をすぼめて牡丹餅を信濃喰ひ
 猫を追ひ出して信濃は焚きつける
 まき車信濃をませて引て來る
 五々二十五きれと信濃笑はれる
 色男どうだと信濃なぶられる
 信濃者だれか本田に結つてやり
 信濃者につこりとして喰ひかゝり
 信濃者ぶらりくと直うりをし
 信濃をばお寺のやうに直をきめる

信濃でも京へ出すのはすないな
 信濃から來て名月を一ツ見る
 信濃から來たどつん出す病上り
 信濃宿けだもの店のやうに寢せ
 骨髄にうまさうに喰ふ信濃者
 大きな内でぞんざへる信濃者
 脾胃虚さと藪齧見たてる信濃者
 脾胃虚とはなんの事だとおしなひ
 おしなやと呼んだを見れば男なり
 堆く盛つたをおしな五杯喰ひ
 彦七の苗字をおしな五杯喰ひ
 〔解〕大森と大盛
 盛りつけた上をおしなはねちる也
 きうびまでおしな三度が三度つめ

しな助やお櫃の底を鳴らしやるな
 暴食をしにぞろく。と江戸へ出る
 挽割の袋が米を喰ひに来る
 一ヶ國一ト冬江戸で喰つて来る
 冬の内月三斗づゝ喰込まれ
 蕪汁で浅間左衛門五杯喰ひ
 木曾の殘党を冬中こき使ひ
 手と足の長い野郎を冬抱へ
 追ひ焚きの下へさんまをつゝくべる
 あの瘦せでおめしは四せん五せん喰ひ
 百八十四文さんまの膳へ出し
 前記の如く信濃者は多く冬中雇はれ、翌年の二月に歸國するのである。

豆いりをかみく信濃暇乞
 泣き出すを聞て信濃は暇乞

しやうばんに信濃もさんりすえて立ち

十二月

和名を師走と云は、昔しは此月諸家に佛名を行ひて、導
 師ひまなく走り行くなれば、師走り月を畧せりと。

○又云、しはすは四時のはつる月なれば、しはつき四極月なるべし、豊後に四極山と云ふ有、此心かよへり、又極月といへ
 るも此意なり、○殷の世は此月を正月とす。

じれつたく師走を遊ぶ針とがめ
 二の足で師走の土手を踏んで行く
 たいさうに笑つて師走叱られる
 きりく配れ師走だぞく

〔解〕配り餅、

持ち持つて来たど師走はかたをつけ
 綿屑の付いたが師走女なり
 極月は小で困ると不覺者

極月は半月やつてたなをあげ
正月にかき廻される十二月
いゝといふ人は少ない十二月
十二月さう笑つては済まぬなり
十二月人を叱るに日をかぞへ
かぞへ日は親のど子のは大違ひ

○朔日 今日より節季候いづる。

節季候の出る日は、十一月「御講」の部にて述べし如く、時代に依て一定して居らぬ、
『續江戸砂子』出版の享保頃は、十二月朔日から出たものと見ゆる。

○八日 事納 めかごをつる事、二月におなし○今日を臘八と云、けふ竈を祭るべし、

【破時記】竝ニ以ニ豚酒ヲ祭ル竈神ヲ。

事納めに就ては、二月八日「事始」の部に併せ記したれば、爰には例句のみを掲げる。

其論は春の事よと 箆を出し
板の間へ茶をぶちまける事納

めしたきの一べんさかす事納
事納 氣をつけてられぬ新世帯
氣をつけて箆を出させる新世帯

次に竈神を祭る日に就き『五雜俎』には、十二月二十四日竈を祀る、謂へらく竈神この
夜天に上りて、一家の善悪を以て天に奏す、是日婦人女子齋を持す云々。『俳諧歳時記』
にも、我俗十二月下旬修験者を招きて竈神を祭る、これを竈穢、又竈注連といふ、五
月九月又おなし、とある如く十二月下旬に祭るとの説であるが、享保頃は八日に祭つ
たのであらう。

竈穢の扮装は、身に薄衣を着け、手に鈴と幣又は扇を持つて市中を徘徊し、人の請す
るまゝに祝ひ言葉にふしをつけて、竈の神を穢ふのを業としたのである、竈穢の名目
は天和以後に起つたもので、寶永頃までは専ら女子が顔に化粧を施し、美装をして市
中を唄ひながら歩き、寡夫や旅人に淫を鬨いだものである。正徳の頃に至り、烏帽子
水干を着て、手に幣を持ちし男の竈穢が出来たが、いつしか女子の勢力に壓せられて
さまで流行せず終つたのである。

川柳勃興當時の寶曆時代に於ける竈菝の扮装並に風俗に關しては『教訓不辯舌』に、すこし龜の甲形の笠をかぶり、姿り、しく腰帶しやんとしめて、木綿裝束にて何の商賣とも知れずたゞぶらり／＼と表をあるくものあり、此名を巫子と呼べり、又神いさめと名付宮祠の巫女をまね、大麻鶴龜の模様の付きたる白練衣を着、鈴扇を持って、人の門口を搦からき聲、又はさもいつくしき聲にて、時々祝ひ詞にふしをつけて云廻る者、是を釜拂と云、此類の者渡世の爲にあるきけるに、或家に巫子を呼入て口寄せしてもらひ、涙ながしながら錢十二銅と米とを與へるを、隣に住む釜拂之を見て、泣く事にこと缺て、錢出して迄も泣きたきものかといふを聞、巫子怒りて片肌ぬぎになつて我鳴込めば、釜拂も血眼になり、ナント泣くの錢出し！買ふやうなものではないか、何だか先きの知れぬ事を云廻り、錢ばかりとる大かたりめ、其上若い衆の一人居る所へ呼ばれるれば、笠を仰向にして這入り、百錢づゝも貰うでないか、そんな穢れた身で神前へはならぬ早く出て行けと罵れば、巫子なほ／＼腹を立て、笠を仰向にするとはどういふ事だ、そういふそちたちは、道のあるくを若い衆が呼込んで、鈴がなりますかといへば。アイといふて小宿へはいり錢をとり、馴染を重ねては、櫛笄或は

鈴扇まで貰て貰うであらうが、大ぬすつと女とつかみ合ふを、相長屋の者共仲成して引わければ、巫子例の簀を出して水をつけ、我と我手に手向して、釜拂の身の上をいのりければ、巫子も釜拂も夢中となる見えしが、其うち巫子はうなり出し、我は是元釜拂なれども、鈴なりの土手組といふより、釜拂は起き上り、夢の覺めたる躰なりしが、巫子はまだ眠りゐて又うなり出し、我も元は仰向笠の同類なりと云ひ出せば、寄集りし者は横手をうち、人を呪はば穴二つと、寄合て巫子を追出しけり。云々である如く當時の竈菝は内職に淫賣をしたことが明かであるが、古川柳には竈菝を隠賣婦として咏んだ句は見當らぬ。

竈菝 額で鈴を振り納め
 竈菝 じやく馬ほごに舞をまひ
 竈菝 是非なく鈴を暫し貸し
 竈菝 扱われは乙女の氣であるき
 竈菝 扱しもげた親爺箱をもち
 竈菝 吹き出す湯氣に後じさり

竈穢下女は笑ふに藏へ逃げ
 竈穢時、氣障な聲を出し
 竈穢餘所の銅壺の評判し
 神子の穴ふんまけて行く竈穢
 いやらしく鈴をいたゞく竈穢
 萬歳のあとで氣のない竈穢
 飯焚のうやまつて聞く竈穢
 竈注連の内は飯焚かしこまり
 竈注連の直を聞きに来る新世帯
 御竈注連何やら嫁にいたゞかせ
 何の氣もないに御幣をいたゞかせ
 竈穢も巫子も、もと縣神子と稱へたのであるが、貞享の頃から二種に分れ、竈の神を
 穢ふ者を竈穢と稱し、梓弓を取て口寄せする者を巫子と稱するに至つたのである、参
 考の爲め左に巫子の句を掲げる。

梓弓下女の涙は土間へ落ち
 偽りをいふかも知れず梓弓
 後添の内儀いちこといちぢり合ひ
 いとあはれな聲にていちこいひ
 おゝさうさゝくにいちこかつにのり
 口寄せを嘲り息子呵られる
 亡者の聲色を聞くには水をむけ

▲十三日 御煤掃 屋敷方町屋ともに多く當日すゝをはく也。
 すゝ竹賣ル、荒神の繪馬賣ル、おはらひ納出ル、

御煤掃の例は寛永十七庚辰十二月十三日に始まつたので、貴賤多く此日を用ゆるに至つたとの説であるが、一説には此日鬼宿にあたり吉日なれば煤を拂ふとある。當日煤を掃いた後、胴上げをするのを儀式として、不斷憎まれて居る番頭や女中などは、悪戯をされたのである。

十三日 やれ首を持って足をもて

十三日 おはした目より高く上げ
 十三日 腹をたつのも其日きり
 十三日 覚えて居なはそれつきり
 十三日 長追ひをしてとつかまり
 十三日 柱から下女ひつばがし
 十三日 追ひつ追はれつ草臥れる
 十三日 網戸の中で嫁笑ひ
 十三日 狎をおどして呵られる
 十三日 旦那の鎗が出すじまひ
 十三日 窓から下女が横に見る
 十三日 ぐっり迄うつ御小身
 十三日 見ツこなしよと下女つかれ
 十三日 氷も物の置き所
 十三日 ふだんの顔はぶしやうもの

十三日 富札の出る恥しさ
 十三日 装束すぎて呵られる
 十三日 番頭白いざいを振り
 十三日 おれをもつけとねだられる
 十三日 遣手一期の引けをとり
 十三日 手もつけられぬはらで出る
 十三日 かんりやく奉行奥へ逃げ
 十三日 五百の天窓はりこはし
 十三日 十三番のありがたさ
 十三日 めでたく意趣を返す也
 腹立てば野暮らしくなる十三日
 御局はそつとくの十三日
 山谷堀船で子の泣く十三日
 座敷半腰縄で出る十三日

年中行事

琴箱をよいくで出す十三日
そつと持出せ海鼠だと十三日
御持佛はお袋が、り十三日
ごうれいと黒ン坊の出る十三日
嫁のうす芋かけに勝つ十三日
はなれ馬とまらう事か十三日
雑巾で大文字を書く十三日
行燈をとぼして、張る十三日
神くの大たばを出す十三日
白晝に門を叩くは十三日
弾きながら三味線運ぶ十三日
年寄は抱いた斗りの十三日
おれだわへ吠えるなといふ十三日
振つた下女見せつけられる十三日

炭部屋もたづねて見ろと十三日
おかしさは瘡のおちた十三日
壘敷く助言の多い十三日
亀相申したお宿かど十三日
ぬす人のしんるいも有る十三日
一番手捕つたとか、る十三日
天井へ下女のくつ、く十三日
嫁のおもては白く、と十三日
鯁賣も十三日は黒日なり
十二日から色男ねらはれる
よくくが十四日迄腹を立て
一昨日はむさくしたなど十五日
煤掃の下知に田中の局が出
煤掃の顔を洗へば知つた人